

富山県の校歌の研究
～調性・音域・ヨナ抜き音階の観点から～

The study of School Songs in Toyama Prefecture
from the point of view of the tonality and the range
and the musical scale without 'fa' and 'si'

堀 江 英 一
HORIE Hidekazu

富山県の校歌について、調性・音域・ヨナ抜き音階の観点から時代別に調査した。その結果、県内の校歌に用いられている調性は、時代が進むにしたがって限られた種類になっていったこと、校種によって用いられた調性の傾向が異なること、調性によって音域に特徴があることが分かった。

さらに、特定の作曲者に関して調性の嗜好が見られることも分かった。

音階については、明治以来唱歌や童謡、軍歌、演歌、歌謡曲に用いられたいわゆるヨナ抜き音階を用いた校歌の割合を調査した。

その結果、戦前から戦後初期にかけて割合が高く、時代が進むにしたがって割合が減少していることが分かった。

キーワード：富山県、校歌、調性、音域、ヨナ抜き音階

I 問題の所在

富山県内で最も古い校歌は、調査できた範囲では明治 27 (1894) 年に制定された旧婦負郡婦中町・現富山市の千里尋常小 (現神保小) と、同年に制定された富山県工芸学校 (現県立高岡工芸高) である。奇しくもこの年は、日清戦争開戦の年であるとともに、小学校で歌う唱歌が (当時、校歌も唱歌の一種と考えられていた) すべて文部省の認可を受けなくてはならなくなった年でもある。¹ 以来、今日に至るまで数多くの校歌が制定されてきた。

これらの校歌は、時代によって調性の傾向が異なるのであろうか。それとも、歌う年代が同じ

¹ 『文部省訓令第七号』～「小学校ニ於テ唱歌用ニ供スル歌詞及楽譜ハ本大臣ノ検定ヲ経タル小学校教科用図書中ニ在ルモノ又ハ文部省ノ撰定ニ係スル及び地方長官ニ於テ本大臣ノ認可ヲ受ケタルモノノ他ハ採用セシムヘカラス但他ノ地方長官ニ於テ一旦本大臣ノ認可ヲ経タルモノハ此ノ限ニ在ラス」(文部大臣 西園寺公望、官報第 3452 号)

であるため、同じ傾向をもつのであろうか。そしてその調性は、音域とどのような関係があるのだろうか。

また、用いられている音階、とりわけ明治以降日本人の旋律感覚に深く根を下ろしたヨナ抜き音階は、どの程度用いられているのであろうか。そして、時代ごとに傾向が異なるのであろうか。

これらの点について、現時点ではまだ十分な研究がなされていないようである。今回、県内の校歌を幅広く調査することによって、調性と音域、ヨナ抜き音階についてその特徴と傾向を明らかにすることができた。今後の富山県の校歌研究にいささかでも役立つことを願うものである。

II 研究の方法

富山県内の小・中・高等学校・特別支援学校に、現行の校歌、旧校歌、統合される以前の学校の校歌に関する情報提供の依頼を行った。

小澤達三『富山県校歌全集』（1979年、パラマウント社）、富山県ひとづくり財団・富山県教育記念館『校名・校章・校歌と教育への期待』（2010年、未出版）を用いて、調性、音域、ヨナ抜き音階の割合を調査し、時代ごとの傾向、作曲者の傾向を明らかにした。

III 富山県の校歌の研究～調性・音域・ヨナ抜き音階の観点から～

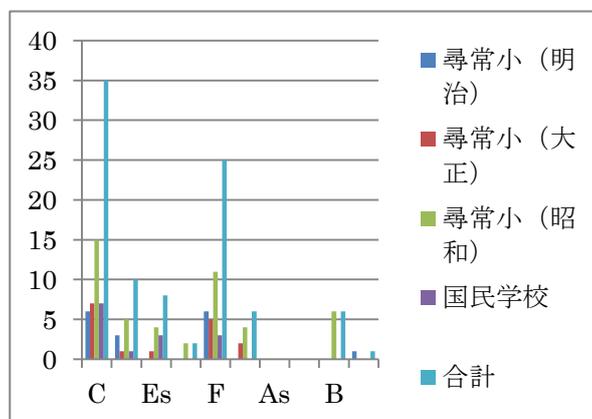
1. 調性

(1) 小学校

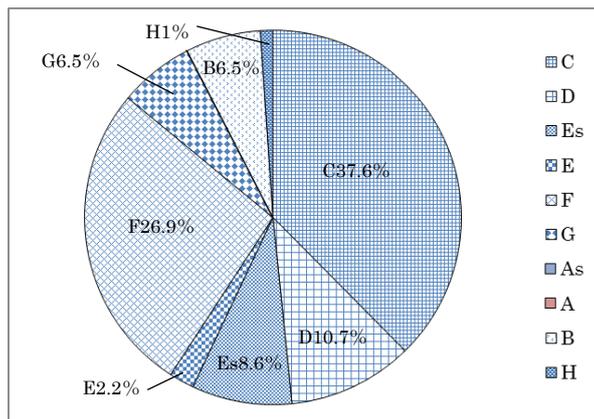
① 旧制小・国民学校の時代

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
尋常小(明治)	6	3			6					1	16
尋常小(大正)	7	1	1		5	2					16
尋常小(昭和)	15	5	4	2	11	4			6		47
国民学校	7	1	3		3						14
合計	35	10	8	2	25	6	0	0	6	1	93

表1 旧制小・国民学校の校歌の調性



グラフ1 旧制小・国民学校の校歌の調性



グラフ 2 旧制小・国民学校の校歌の調性の割合

明治・大正・昭和期の尋常（高等）小、昭和期の国民学校の校歌は、93校を調査した。

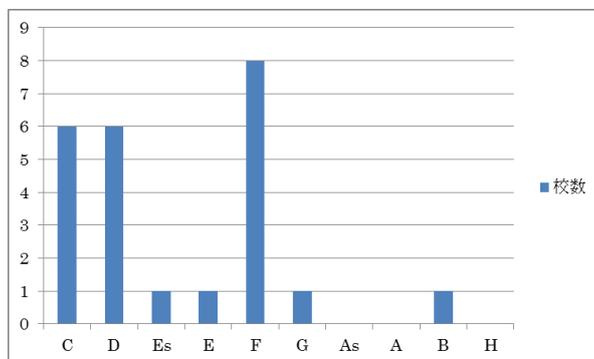
最も多かった調性はC Dur（ハ長調）の35曲で、全体の37.6%であった。次いで多かったのはF Dur（ヘ長調）の25曲で、全体の26.9%であった。3番目はD Dur（ニ長調）の10曲で10.7%、4番目はEs Dur（変ホ長調）の8曲で8.6%、5番目はG Dur（ト長調）とB Dur（変ロ長調）の6曲でともに6.5%であった。なかには、#が5個つくH Dur（ロ長調）も1曲あった。

②昭和22（1947）年度版学習指導要領の時代

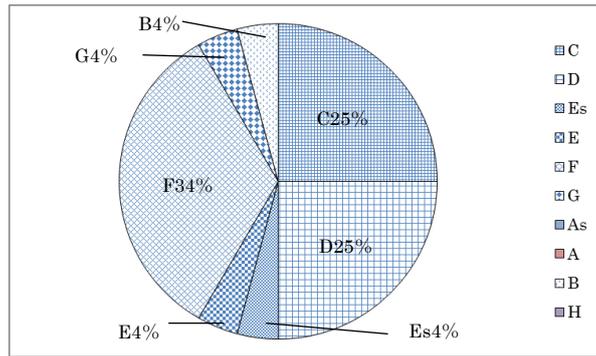
昭和22（1947）年度版学習指導要領の時代の校歌は、24校を調査した。最も多かった調性はF Dur（ヘ長調）の8曲で、全体の34%であった。次いで多かったのはC Dur（ハ長調）とD Dur（ニ長調）の6曲で、それぞれ25%であった。あとはEs Dur（変ホ長調）、E Dur（ホ長調）、G Dur（ト長調）が1曲ずつで、それぞれ4%の割合だった。C Dur（ハ長調）の割合が37.6%から25%に減り、F Dur（ヘ長調）の割合が26.9%から34%に増えている。また、D Dur（ニ長調）の割合も10.7%から25%に増えている。なかには、#が4個つくE Dur（ホ長調）も1曲あった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	6	6	1	1	8	1			1		24

表 2 昭和22年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 3 昭和22年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



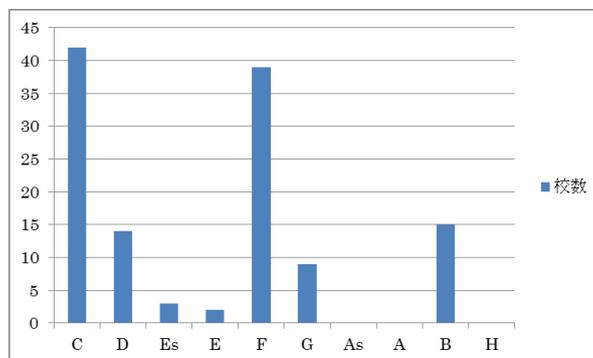
グラフ4 昭和22年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

③昭和26(1951)年度版学習指導要領の時代

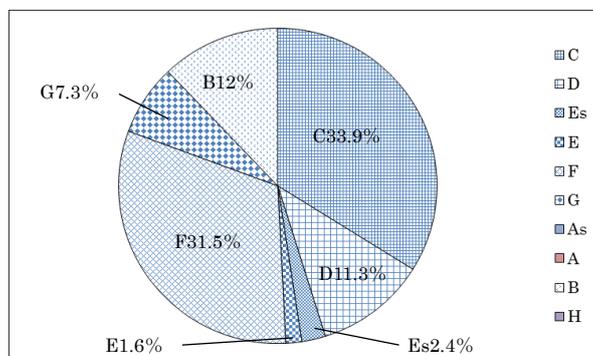
昭和26(1951)年度版学習指導要領の時代の校歌は、124校を調査した。最も多かった調性はC Dur (ハ長調) の42曲、全体の33.9%であった。次いで多かった調性はF Dur (ヘ長調) の39曲で、全体の31.5%であった。3番目はB Dur (変ロ長調) の15曲で12.1%、4番目はD Dur (ニ長調) の14曲で11.3%、5番目はG Dur (ト長調) の9曲で7.3%、あとはEs Dur (変ホ長調) とE Dur (ホ長調) が数曲であった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	42	14	3	2	39	9			15		124

表3 昭和26年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ5 昭和26年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ6 昭和26年度版 学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

C Dur (ハ長調) とF Dur (ヘ長調) の数は毎回逆転しているが、よく用いられる調性である

ことが見て取れる。また、D Dur（ニ長調）も毎回3位または4位となっており、比較的用いられる調性だったことが分かる。

この時代、B Dur（変ロ長調）が15曲で12%と、D Dur（ニ長調）の11.3%をわずかに上回っている。これは、前回まで見られなかった特徴である。

これは、15曲中10曲を作曲した小澤慎一郎によるもので、B Dur（変ロ長調）で作曲することを好んだ傾向が見て取れる。下新川郡朝日町泊の出身で、富山大学では声楽専門の教授、後に富山大学教育学部附属中学校校長を務め、退官後は名誉教授の称号を贈られた人物である。また、富山県合唱連盟理事長として富山県内の合唱界を牽引し、後に富山県合唱連盟初代会長となっている。

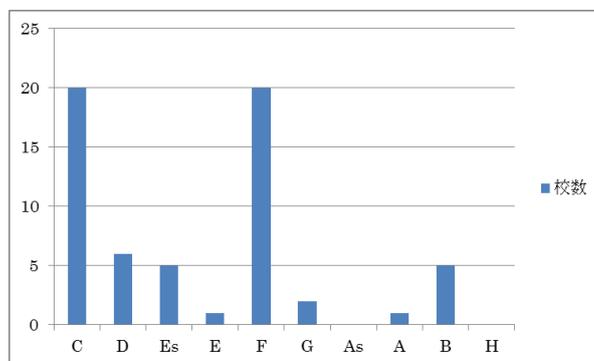
④昭和36（1961）年度版学習指導要領の時代

昭和36（1961）年度版学習指導要領の時代の校歌は、60校を調査した。最も多かった調性はC Dur（ハ長調）とF Dur（ヘ長調）の20曲で、ともに全体の33.3%であった。次いで多かった調性はD Dur（ニ長調）の6曲で、全体の10%であった。3番目はともに6曲だったEs Dur（変ホ長調）とB Dur（変ロ長調）で、全体の8.3%を占める。

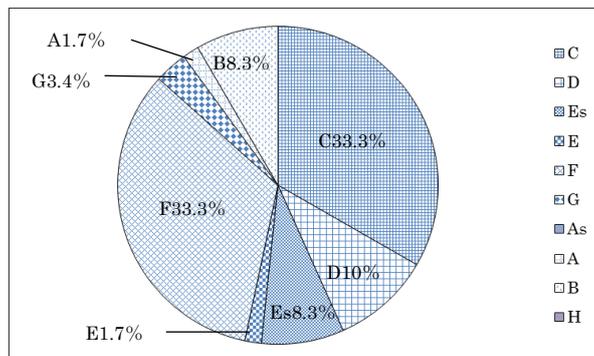
C Dur（ハ長調）とF Dur（ヘ長調）が多く、D Dur（ニ長調）がそれに次ぐという傾向は変わらないことが見て取れる。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	20	6	5	1	20	2		1	5		60

表4 昭和36年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ7 昭和36年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ8 昭和36年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

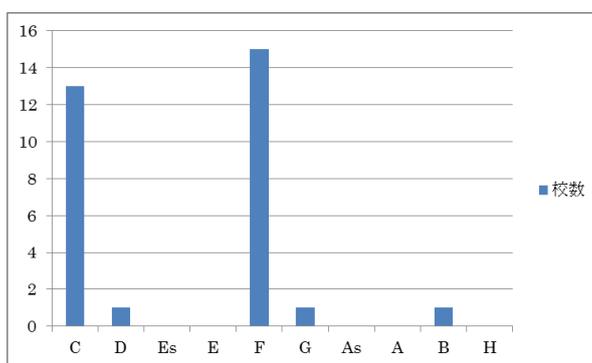
前回同様、B Dur (変ロ長調) も 5 曲で 8.4%を占めるが、これらの 5 曲はすべて小澤慎一郎の作曲である。

⑤昭和 46 (1971) 年度版学習指導要領の時代

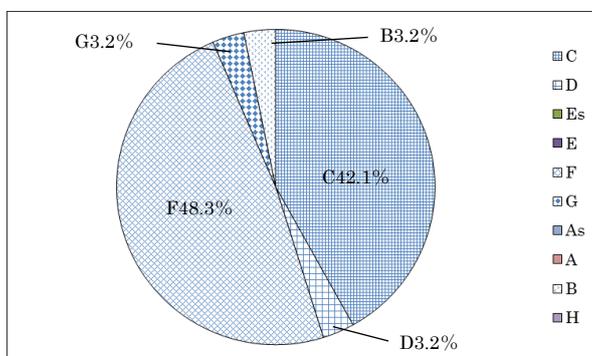
昭和 46 (1971) 年度版学習指導要領の時代の校歌は、31 校を調査した。最も多かった調性は F Dur (へ長調) の 15 曲で、全体の 48.3%にあたる。次いで多かった調性は C Dur (ハ長調) の 13 曲で、全体の 42.1%にあたる。この 2 つの調性で大部分を占めている。また、D Dur (ニ長調) はほとんど見られなくなる。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	13	1			15	1			1		31

表 5 昭和 46 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 9 昭和 46 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



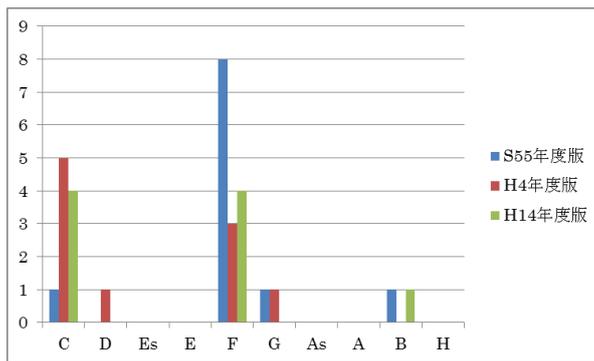
グラフ 10 昭和 46 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

⑥昭和 55 (1980) ～平成 14 (2002) 年度版学習指導要領の時代

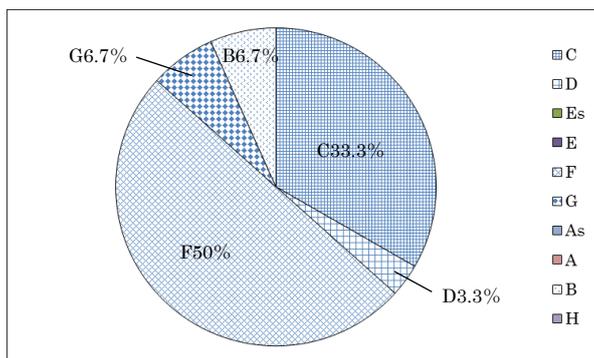
昭和 55 (1980) 年度版学習指導要領の時代以降に制定された校歌は、数が少ないため、平成 14 (2002) 年度版までを合わせた数で調査した。調査できた校歌は 30 校分であった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
S55 年度版	1				8	1			1		11
H4 年度版	5	1			3	1					10
H14 年度版	4				4				1		9
合計	10	1			15	2			2		30

表 6 昭和 55 年度～平成 14 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 11 昭和 55 年度～平成 14 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 12 昭和 55 年度～平成 14 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

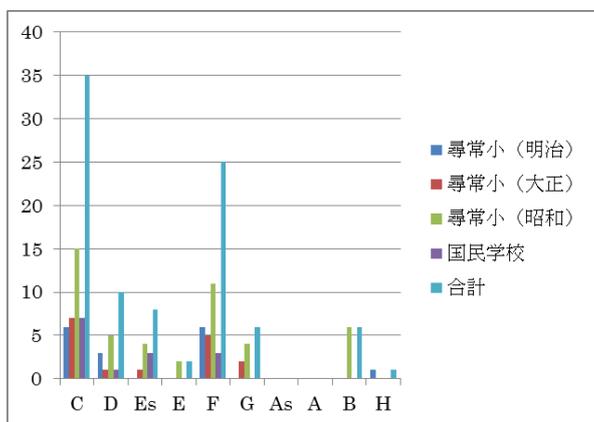
最も多かった調性はF Dur（へ長調）の 15 曲で、全体の 50%を占めた。次いで多かった調性はC Dur（ハ長調）の 10 曲で、全体の 33.3%を占めた。ここでもこの 2 つの調性が大部分を占めており、かつて見られたD Dur（ニ長調）やB Dur（変ロ長調）はほとんど姿を消している。

⑦小学校の調性の傾向

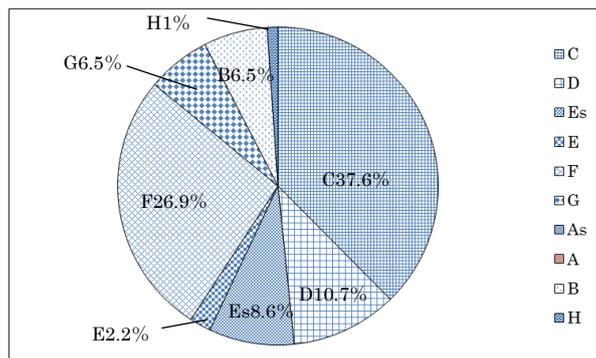
旧制小・国民学校の時代の校歌の調性は以下の通りであった。

旧制小・国民	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	35	10	8	2	25	6			6	1	93

表 7 旧制小・国民学校の校歌の調性



グラフ 13 (再掲) 旧制小・国民学校の校歌の調性

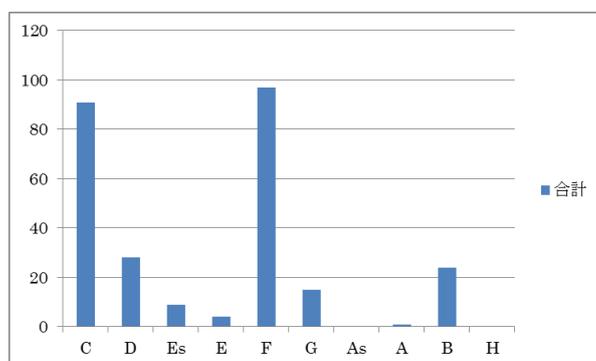


グラフ 14 (再掲) 旧制小・国民学校の校歌の調性の割合

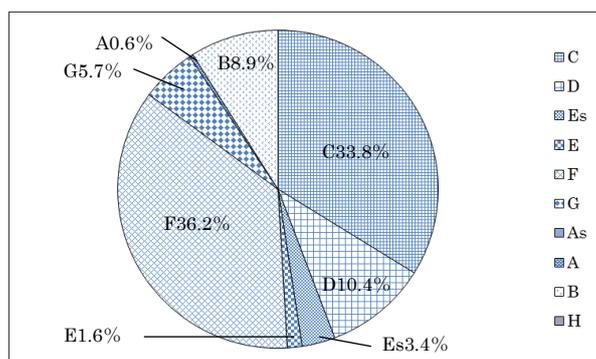
次に、新制小学校になってからの校歌の調性を示す。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	91	28	9	4	97	15		1	24		269

表 8 新制小学校の校歌の調性



グラフ 15 新制小学校の校歌の調性



グラフ 16 新制小学校の校歌の調性の割合

これを見ると、旧制の時代も新制の時代も、C Dur (ハ長調) と F Dur (へ長調) の割合が高い。D Dur (ニ長調) は、全体としては新制の時代にも用いられているように見えるが、時代ごとに見ていくと昭和 46 (1971) 年度版学習指導要領の時代以降は用いられなくなったことが分かる。同じ傾向は、Es Dur (変ホ長調) や B Dur (変ロ長調) にも当てはまる。そして、それ以降は F Dur (へ長調) が 50% 近くになり、C Dur (ハ長調) とともに調性の大半を占めるようになっていく。

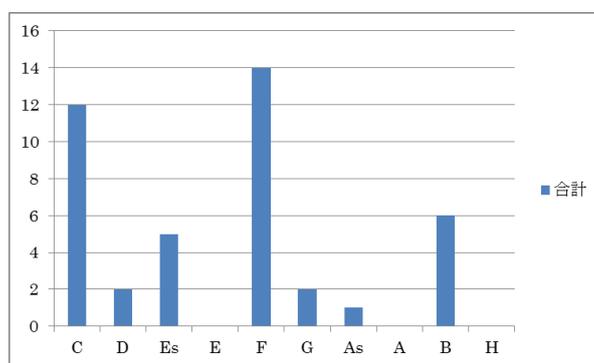
(2) 中学校

①昭和 22 (1947) 年度版学習指導要領の時代

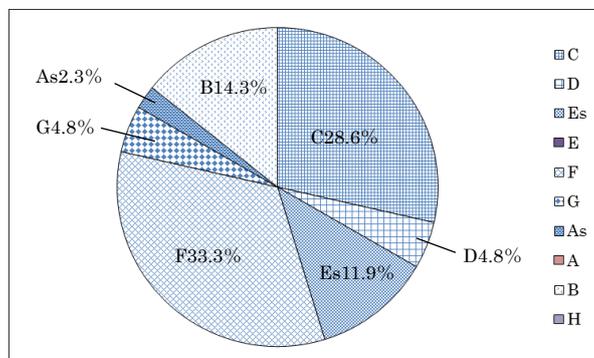
昭和 22 (1947) 年度版学習指導要領の時代の校歌は、42 校を調査した。最も多かった調性は F Dur (へ長調) の 14 曲で、全体の 33.3% を占める。次いで多かった調性は C Dur (ハ長調) の 12 曲で、全体の 28.6% だった。3 番目は B Dur (変ロ長調) の 6 曲で 14.3%、Es Dur (変ホ長調) の 5 曲で 11.9% だった。B Dur と Es Dur の数は、この時代の小学校には見られなかった特徴である。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	12	2	5		14	2	1		6		42

表 9 昭和 22 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 17 昭和 22 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 18 昭和 22 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

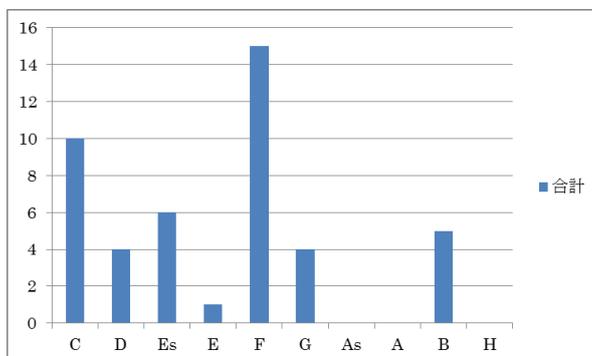
②昭和 26 (1951) 年度版学習指導要領の時代

昭和 26 (1951) 年度版学習指導要領の時代の校歌は、45 校を調査した。最も多かった調性は F Dur (へ長調) の 15 曲で、全体の 33.4% だった。次いで多かった調性は C Dur (ハ長調) の 10 曲で、全体の 22.2% だった。Es Dur (変ホ長調) は 6 曲で、前回の 11.9% から 13.3% に増えている。D Dur (ニ長調) と G Dur (ト長調) はともに 2 曲増えた 4 曲で、前回からそれぞれ 4.1% 増えた 8.9% となっている。

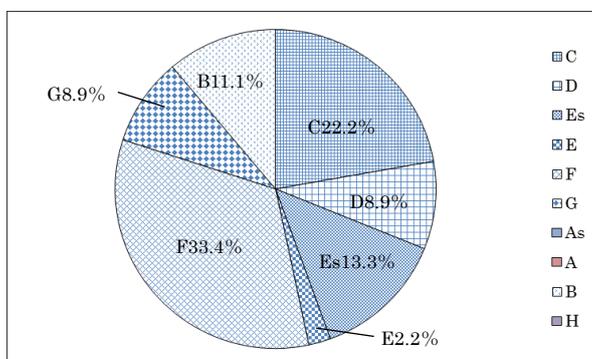
前回と比較して、F Dur (へ長調) と C Dur (ハ長調) が多い傾向は変わらないが、D Dur、Es Dur、G Dur ともに割合が増え、B Dur も割合を減らしているとはいえ、全体の 1 割を維持している。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	10	4	6	1	15	4			5		45

表 10 昭和 26 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 19 昭和 26 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



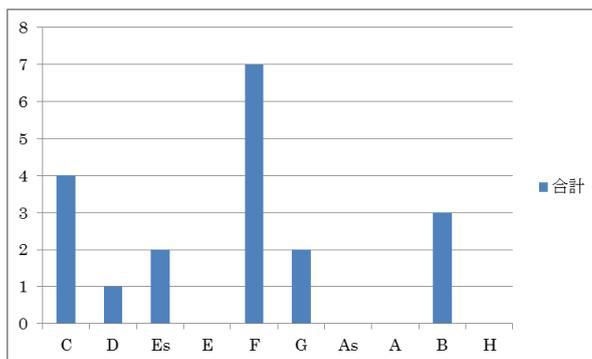
グラフ 20 昭和 26 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

③昭和 37（1962）年度版～昭和 56（1981）年度版学習指導要領の時代

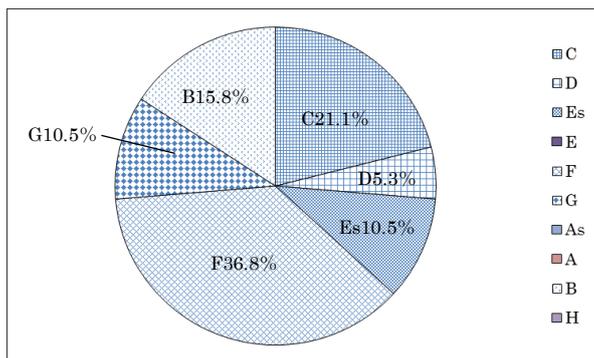
昭和 37（1962）年度版学習指導要領以降は、校歌の制定数が少なくなるため、昭和 56（1981）年度版学習指導要領の時代までを合計した数で調査した。調査できた校歌は 20 曲であった。最も多かった調性はF Dur（へ長調）の 7 曲で、全体の 36.8%だった。次いで多かった調性はC Dur（ハ長調）の 4 曲で、全体の 21.1%だった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	4	1	2		7	2			3		20

表 11 昭和 37～56 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 21 昭和 37～56 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 22 昭和 37～56 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

D Dur (ニ長調)、Es Dur (変ホ長調)、G Dur (ト長調)、B Dur (変ロ長調) は、この時代になっても作曲されている。昭和 46 (1971) 年以降ほとんど見られなくなった小学校とは傾向が異なっている。

④ 中学校の調性の傾向

中学校の校歌に用いられている調性は、小学校と同様に F Dur (ヘ長調) と C Dur (ハ長調) が多いことが見て取れる。ただ、小学校の初期においては C Dur (ハ長調) の方が多いのに対し、中学校の場合は常に F Dur (ヘ長調) が C Dur (ハ長調) より多かった。D Dur (ニ長調)、Es Dur (変ホ長調)、G Dur (ト長調)、B Dur (変ロ長調) はどの時代も少数ながら用いられていることが見て取れる。

(3) 高等学校

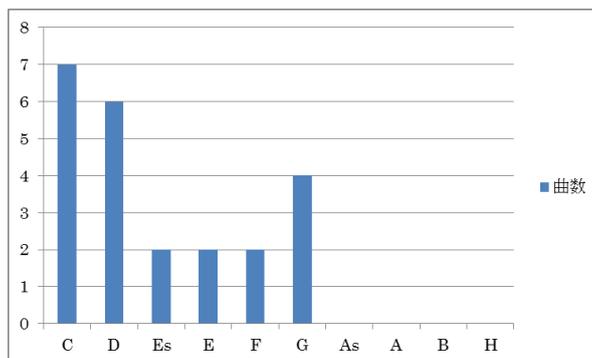
① 旧制学校の時代

旧制学校 (中学校、高等女学校、実業学校など) の時代の校歌は、23 校を調査した。最も多かった調性は C Dur (ハ長調) の 7 曲で、全体の 30.4% であった。次いで多かった調性は D Dur (ニ長調) の 6 曲で、全体の 26.1% であった。3 番目に多かった調性は G Dur (ト長調) の 4 曲で、全体の 17.4% であった。♯が 4 個つく E Dur (ホ長調) が 2 曲あり、ともに高等女学校であった。

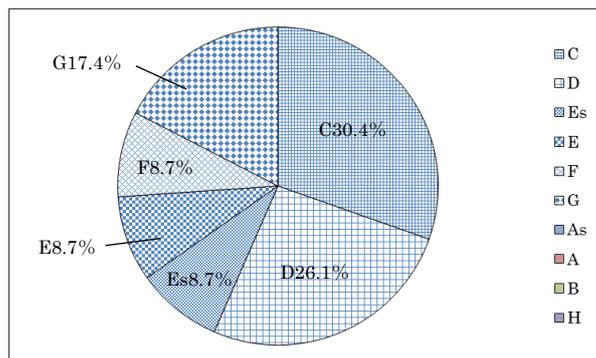
全体的に ♯系の調性が多く、小中学校で多かった F Dur (ヘ長調) は少なかった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	7	6	2	2	2	4					23

表 12 旧制学校の時代の校歌の調性



グラフ 23 旧制学校の時代の校歌の調性



グラフ 24 旧制学校の時代の校歌の調性の割合

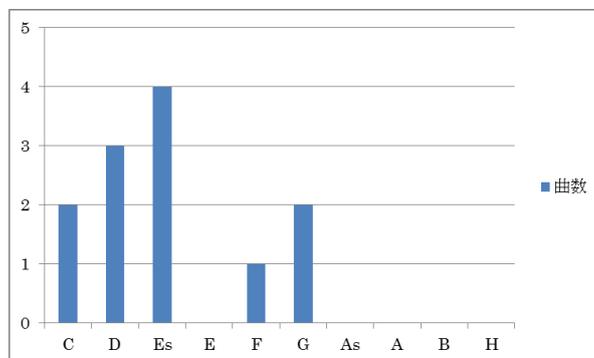
②昭和 22 (1947) 年度版学習指導要領の時代

昭和 22 (1947) 年度版学習指導要領の時代の校歌は、13 校を調査した。母数が小さいため参考値ではあるが、最も多かった調性はEs Dur (変ホ長調) の 4 曲で 33.3%、次いで多かった調性はD Dur (ニ長調) の 3 曲で 25%、3 番目はC Dur (ハ長調) とG Dur (ト長調) の 2 曲で、ともに 16.7%だった。

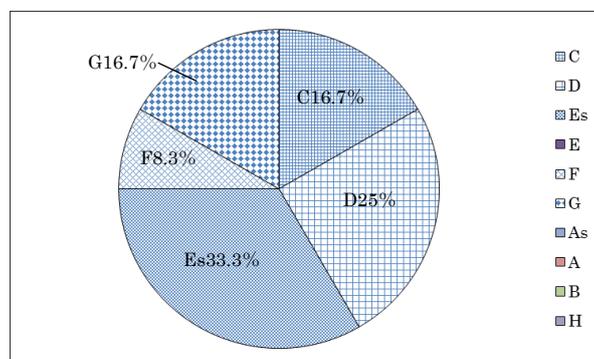
ここでも小中学校で多かったF Dur (ヘ長調) は 1 曲のみと少なく、#系の調性が 41.7%と多かった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	2	3	4		1	2					12

表 13 昭和 22 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 25 昭和 22 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



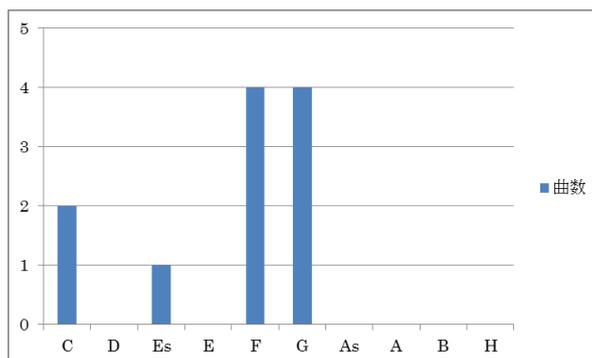
グラフ 26 昭和 22 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

③昭和 26 (1951) 年度版学習指導要領の時代

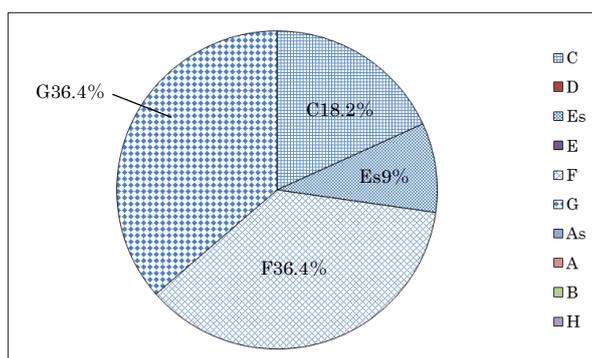
昭和 26 (1951) 年度版学習指導要領の時代の校歌は、11 校を調査した。母数が小さいため参考値ではあるが、最も多かった調性はF Dur (へ長調) とG Dur (ト長調) で、ともに 4 曲、36.4%だった。次いで多かった調性はC Dur (ハ長調) の 2 曲で、18.2%だった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	2		1		4	4					11

表 14 昭和 26 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 27 昭和 26 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性

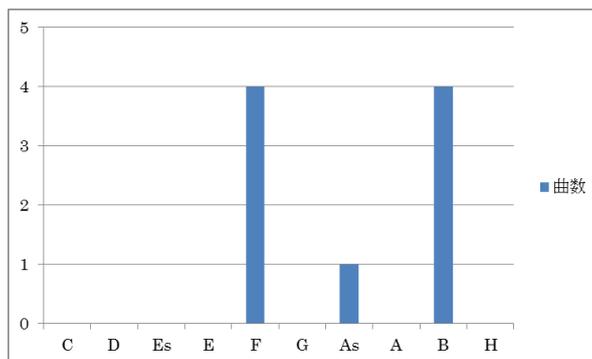


グラフ 28 昭和 26 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

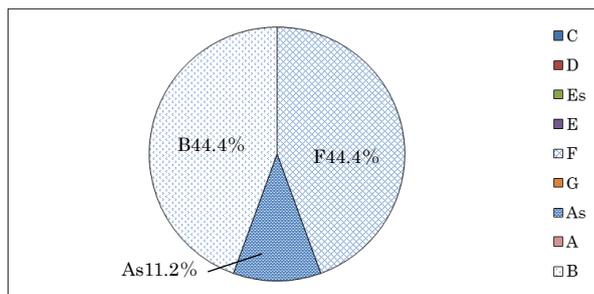
④昭和 31 (1956) 年度版学習指導要領の時代

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数					4		1		4		9

表 15 昭和 31 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 29 昭和 31 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 30 昭和 31 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

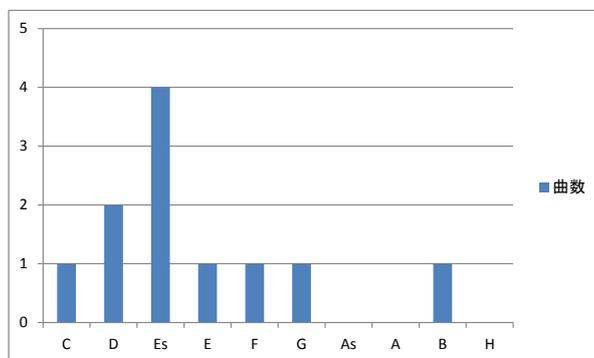
昭和 31 (1956) 年度版学習指導要領の時代の校歌は、9 校を調査した。母数が小さいため参考値ではあるが、最も多かった調性はF Dur (へ長調) とB Dur (変ロ長調) で、ともに 4 曲、44.4%だった。♭が 4 個つくAs Dur (変イ長調) も 1 曲あった。

⑤昭和 38 (1963) 年度版学習指導要領の時代

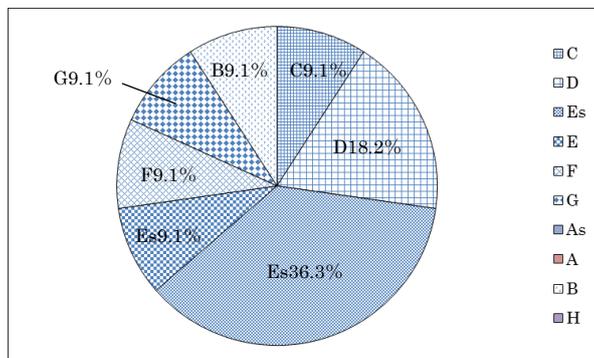
昭和 38 (1963) 年度版学習指導要領の時代の校歌は 11 校を調査した。母数が小さいため参考値であるが、最も多かった調性はEs Dur (変ホ長調) の 4 曲で、全体の 36.3%だった。次いで多かったのはD Dur (ニ長調) の 2 曲で、全体の 18.2%だった。C Dur (ハ長調)、E Dur (ホ長調)、F Dur (へ長調)、G Dur (ト長調)、B Dur (変ロ長調) はともに 1 曲ずつ、それぞれ 9.1%だった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	1	2	4	1	1	1			1		11

表 16 昭和 38 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 31 昭和 38 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性



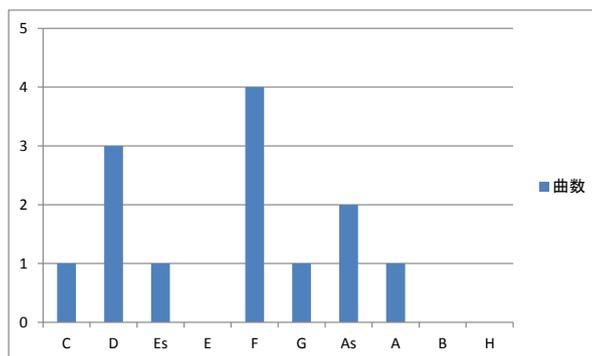
グラフ 32 昭和 38 年度版学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

⑥昭和 48 (1973) 年度版以降の学習指導要領の時代

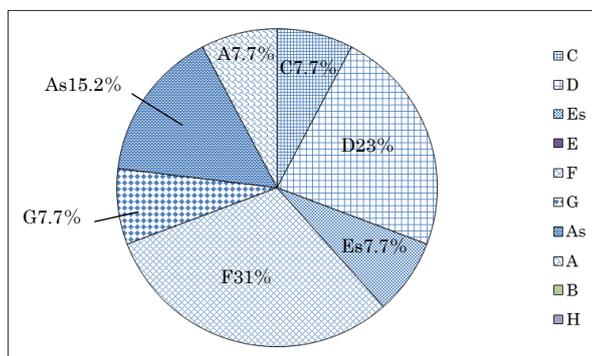
昭和 48 (1973) 年度版以降の学習指導要領の時代の校歌は、13 校を調査した。母数が小さいため参考値であるが、最も多かった調性はF Dur (へ長調) の 4 曲で、全体の 31%だった。次いで多かった調性はD Dur (ニ長調) の 3 曲で、全体の 23%だった。3 番目はAs Dur (変イ長調) の 2 曲で 15.2%、C Dur (ハ長調)、Es Dur (変ホ長調)、G Dur (ト長調)、A Dur (イ長調) は各 1 曲ずつ、それぞれ 7.7%だった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
曲数	1	3	1		4	1	2	1			13

表 17 昭和 48 年度版以降学習指導要領の時代の校歌の調性



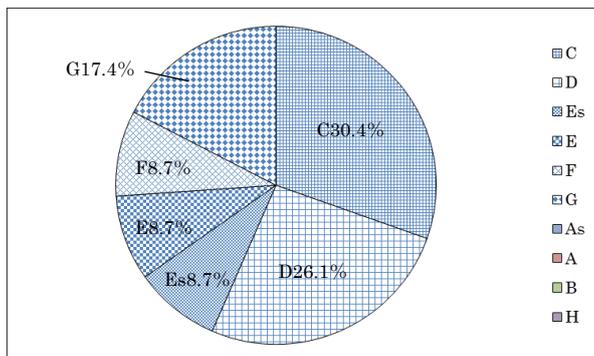
グラフ 33 昭和 48 年度版以降学習指導要領の時代の校歌の調性



グラフ 34 昭和 48 年度版以降学習指導要領の時代の校歌の調性の割合

⑦旧制学校・新制高等学校の調性の傾向

旧制学校の時代の校歌の調性は次のようであった。

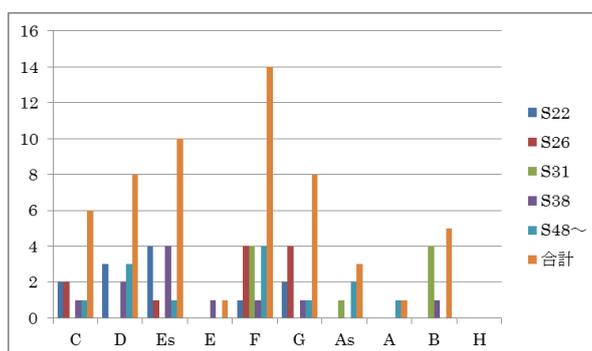


グラフ 35 (再掲) 旧制学校の時代の校歌の調性の割合

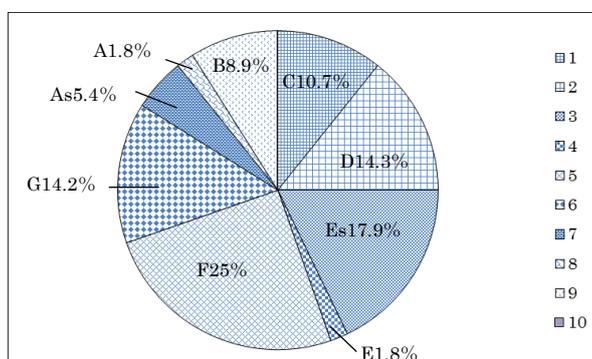
新制高等学校の校歌の調性は次のようであった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
S22	2	3	4		1	2					12
S26	2		1		4	4					11
S31					4		1		4		9
S38	1	2	4	1	1	1			1		11
S48～	1	3	1		4	1	2	1			13
合計	6	8	10	1	14	8	3	1	5	0	56

表 18 新制高等学校の校歌の調性



グラフ 36 新制学校の時代の校歌の調性



グラフ 37 新制学校の時代の校歌の調性の割合

旧制学校の時代は、全体的に＃系の調性が多かった（＃系 52.2%、♭系 17.4%）が、新制高等学校の時代になると♭系の調性が多く（＃系 47.7%、♭系 57.2%）なっている。また、旧制学校の時代で多かったC Dur（ハ長調）とD Dur（ニ長調）は、新制高等学校の時代になると少なくなり、小中学校で多かったF Dur（ヘ長調）は昭和 26 年度版学習指導要領の時代になってから増えている。

2. 音域

(1) B Dur（変ロ長調）

B Dur（変ロ長調）で書かれた校歌の音域を見ると、最低音はB⁰（変ロ）が多く、中学校ではそのほとんどがB⁰（変ロ）である。最高音はD²（2点ニ）が多い。

学校名	制定	As0										As1													
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2
南保	1929																								
吾川	1935																								
町太	1935																								
大家庄	1936																								
大町	1938																								
師範学校附属	1940																								
境	1947																								
二上	1951																								
吾島	1951																								
下立	1952																								
西田地方	1952																								
旧石動	1953																								
柳町	1953																								
白萩西部	1953																								
八幡	1954																								
白萩南部	1954																								
神保	1954																								
豊田	1955																								
長岡	1955																								
上原	1957																								
山加積	1959																								
草島	1961																								
倉垣	1961																								
田家2014	1962																								
西五位	1962																								
星井町2004	1963																								
大谷	1971																								
津次	1981																								
神通郷	2003																								

図1 B Dur (変ロ長調) の音域 (旧制小・新制小学校)

学校名	制定	B0										Es1														
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
白萩	1947																									
最野	1948																									
旧上市	1949																									
新渡中部	1949																									
泊	1950																									
石動	1950																									
新庄	1961																									
新渡東部	1951																									
水見北部	1957																									
若林	1957																									
権山	1960																									
鳳池	1969																									
芳野牧野分	1970																									
上市	1971																									
大門	1971																									

図2 B Dur (変ロ長調) の音域 (中学校)

現学校名	制定	B1										Es2														
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
伏木高	1950																									
高岡第一高	1959																									
南砺福光高	1960																									
南砺総合福祉	1961																									
高岡高	1962																									
南砺平高	1971																									

図3 B Dur (変ロ長調) の音域 (旧制学校・新制高等学校)

(2) C Dur (ハ長調)

C Dur (ハ長調) で書かれた旧制小・新制小学校の校歌の音域を見ると、最低音はC¹ (1点ハ) が多く、最高音はD² (2点ニ) が最も多く 48.3% (57校) で、次いでE² (2点ホ) の 33.9% (40校)、3番目がC² (2点ハ) の 17.8% (21校) だった。

学校名	制定	B1										Es2														
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
北畠若鷲高	1908																									
吉江	1909																									
中野	1909																									
横田	1910																									
入富	1910																									
泊	1914																									
広瀬	1915																									
東石黒	1916																									
柳田	1919																									
千田	1922																									
若林	1922																									
布勢	1925																									
舟見	1925																									

図4-1 C Dur (ハ長調) の音域 (旧制小・新制小学校)

学校名	制定	Es1												As1												Es2											
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2											
千垣岩崎	1977																																				
中太閤山	1978																																				
立山芦崎	1979																																				
鯉谷	1979																																				
福光東部	1982																																				
達川	1992																																				
すみさと	1994																																				
新渡南部	1995																																				
海峰	1996																																				
みさひ野	1999																																				
比美乃江	2006																																				
中央	2008																																				
瀬浦	2011																																				
清波	2015																																				

図 4-3 C Dur (ハ長調) の音域 (旧制小・新制小学校)

C Dur (ハ長調) で書かれた新制中学校の校歌の音域を見ると、最低音はC¹ (1点ハ) が多く、最高音はD² (2点ニ) とE² (2点ホ) が同数で 40% (各 10 校)、次いでC² (2点ハ) が 20% (5 校) だった。

学校名	制定	Es1												As1												Es2											
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2											
上東	1947																																				
堀川	1947																																				
旧南部	1947																																				
東部	1949																																				
出町	1949																																				
庄西	1949																																				
福光	1949																																				
白岩	1949																																				
白鷹(西部)	1950																																				
新渡西部	1950																																				
城崎	1950																																				
井波	1950																																				
山室	1951																																				
津沢	1951																																				
上平	1951																																				
高・野父	1951																																				
黒部	1951																																				
小杉	1952																																				
南部	1952																																				
八代	1952																																				
吉江	1955																																				
福西	1955																																				
作道	1965																																				
伏木	1967																																				
入善西	1975																																				

図 5 C Dur (ハ長調) の音域 (新制中学校)

C Dur (ハ長調) で書かれた旧制学校・新制高等学校の校歌の音域を見ると、最低音はC¹ (1点ハ) が多く、最高音は小中学校とは異なりE² (2点ホ) が多かった。これは、声域が高い女子生徒が通う高等女学校が含まれることに理由を見出せるかもしれない。

学校名	制定	Es1												As1												Es2											
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2											
県工芸学校	1894																																				
富山中学	1910																																				
石動高女	1920																																				
柳道中学	1921																																				
福野農学校	1924																																				
氷見高女	1926																																				
戸出実科高女	1928																																				
氷見高女	1939																																				
氷室	1948																																				
伏木商業学校	1949																																				
小杉高	1950																																				
不二越工業	1951																																				
石動	1953																																				
清光女子	1963																																				
びなひ野	2001																																				

図 6 C Dur (ハ長調) の音域 (旧制学校・新制高等学校)

(3) D Dur (ニ長調)

D Dur (ニ長調) で書かれた旧制小・新制小学校の校歌の音域を見ると、最低音はD¹ (1点ニ) が多く、21 校であった。次いで多かったのはA⁰ (イ) で 14 校であった。最高音はD² (2点ニ) が多く 23 校で、次いでE² (2点ホ) の 11 校だった。

圧倒的に多く、最高音はEs² (2点ホ) が大部分を占めている。

学校名	制定	Es ¹												Es ²												
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
浅井	1913																									
小樽戸	1928																									
八尾	1934																									
八人町	1935																									
浦山	1936																									
広強	1942																									
村橋	1944																									
田中	1949																									
新川西部	1952																									
牧野	1957																									
下関	1960																									
小・東部	1961																									
西広谷	1962																									
水・岩瀬	1963																									
大沢野	1966																									
滑・東部	1969																									

図10 Es Dur (変ホ長調) の音域 (旧制小・新制小学校)

Es Dur (変ホ長調) で書かれた新制中学校の校歌を見ると、小学校の場合と同様に最低音はB⁰ (変ロ) が圧倒的に多く、最高音はEs² (2点変ホ) が大部分を占めている。

現学校名	制定	Es ¹												Es ²												
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
芳野	1947																									
富山大附属	1948																									
呉羽	1950																									
般若	1950																									
射北北部	1950																									
奥田	1951																									
旧城山	1951																									
城山	1951																									
不動	1953																									
黒・北部	1958																									
桜井	1960																									
上庄谷	1963																									
高古	1975																									

図11 Es Dur (変ホ長調) の音域 (新制中学校)

Es Dur (変ホ長調) で書かれた旧制学校・新制高等学校の校歌を見ると、小中学校の場合と同様に最低音はB⁰ (変ロ) が圧倒的に多く、最高音はEs² (2点変ホ) が大部分を占めている。Es Dur (変ホ長調) はC Dur (ハ長調) やD Dur (ニ長調) と比較して音域を広く取ることができるとともに、モチーフやメロディーが多様になり、音楽としての質の高まりが期待できる調性となっている。

学校名	制定	Es ¹												Es ²												
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
射水中学	1930																									
富山中学	1931																									
雄山	1949																									
富山北部	1949																									
上市高	1950																									
富山中部	1950																									
南砺総合福祉	1950																									
有磯	1953																									
富山第一	1963																									
富山東	1964																									
新渡工業	1964																									
三上工業	1965																									
呉羽	1984																									
高岡西	1997																									

図12 Es Dur (変ホ長調) の音域 (旧制学校・新制高等学校)

(5) E Dur (ホ長調)

E Dur (ホ長調) で書かれた校歌を見ると、最低音はH⁰ (ロ) が多く、最高音はE² (2点ホ) が多い。Es Dur (変ホ長調) と同様、音域を広く取ることができ、音楽としての質の高まりが期待できる調性である。また、#4 個の調性をもつ明るさによって、富山高等女学校や高岡高等女学校、戸出女子高等学校など、この年代の女子生徒がもつ清純な高音域を生かした曲づくりが期待できる調性であるともいえる。

小学校名	制定	音域																								
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
古黒部尋	1934																									
吉田	1939																									
東部	1948																									
堀・森野	1951																									
種田	1954																									
東中江	1966																									

中学校名	制定	音域																								
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
瀬浦	1951																									

旧新高校名	制定	音域																								
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
富山高女	1923																									
高岡高女	1927																									
雄峰	1949																									
新川女子	1968																									
戸出女子	不詳																									

図 13 E Dur (ホ長調) の音域

(6) F Dur (へ長調)

F Dur (へ長調) で書かれた旧制小・新制小学校の校歌を見ると、最低音はC¹ (1点ハ) が圧倒的に多く、最高音はD² (2点ニ) が圧倒的に多い。

学校名	制定	音域																								
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
千早	1894																									
小杉尋高	1903																									
早月加積尋	1904																									
福光	1909																									
富川	1909																									
養谷	1910																									
西大妻	1916																									
放生津尋	1917																									
福野南郡	1917																									
旧五箇庄	1919																									
熊野	1927																									
石田	1928																									
富中江	1931																									
五百石	1931																									
大島	1933																									
能町	1934																									
新瀬戸	1935																									
高・木田	1935																									
宮崎	1937																									
大森	1940																									
楡原国民	1943																									
浜黒崎	1946																									
保内	1946																									
東加積	1947																									
皆養	1947																									
西赤尾	1947																									
笹川	1948																									
寺家	1948																									
新加積	1949																									
佐野	1950																									
本江	1950																									
蔵木	1951																									
相ノ木	1951																									
西条	1951																									
百瓶東部	1951																									
大久保	1952																									
上中島	1952																									
片口	1952																									
瀧丸町	1952																									
上郷	1953																									
旧中田	1953																									
楡原	1953																									
文殊寺	1953																									
古里	1953																									
綱谷	1953																									
小泉	1954																									
遠牧	1954																									
広田	1954																									
旧小杉	1954																									
小巻	1954																									
北松若	1954																									
越田	1955																									
大庄	1955																									
東五位	1955																									
旧大門	1955																									
立野	1956																									
釜山小	1957																									
大瀬屋	1957																									
赤丸	1958																									

図 14-1 F Dur (へ長調) の音域 (旧制小・新制小学校)

学校名	制定	音域																								
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
植生	不詳																									
井口	不詳																									
森久	不詳																									
野村	不詳																									
上妻	不詳																									
福光西部																										

図 17-2 G Dur (ト長調) の音域 (旧制小・新制小学校)

G Dur (ト長調) で書かれた新制中学校の校歌を見ると、最低音はD¹ (1点ニ) が多く 5 校であった。次いで多かったのはH⁰ (ロ) で 3 校であった。最高音はD² (2点ニ) とE² (2点ホ) が同数でそれぞれ 4 校であった。

学校名	制定	音域																								
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
東部	1947																									
岩瀬	1949																									
北郷	1951																									
高岡北部	1951																									
大沢野	1951																									
小川	1958																									
北部	1967																									
片山学園	2005																									

図 18 G Dur (ト長調) の音域 (新制中学校)

G Dur (ト長調) で書かれた旧制学校・新制高等学校の校歌を見ると、最低音はD¹ (1点ニ) が多く 8 校であった。次いで多かったのはH⁰ (ロ) で 4 校であった。最高音はE² (2点ホ) が多く 8 校、次いで多かったのはD² (2点ニ) で 3 校であった。

学校名	制定	音域																								
		G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2	G2
富山商業学校	1908																									
高津中学	1921																									
福渡高女	1926																									
高岡中学	1933																									
高岡西部	1949																									
新渡	1950																									
入善	1951																									
高岡工業	1951																									
高岡	1952																									
富山工業	1952																									
小矢部蘭芸	1968																									
片山学園	2005																									

図 19 G Dur (ト長調) の音域 (旧制学校・新制高等学校)

3. 特別支援学校等の校歌

(1) 特別支援学校の校歌の調性と音域

学校名	調性	制定	音域																							
			G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2
びなみ東支援	B	1983																								
富山視覚総合支援	C	1951																								
高岡聴覚総合支援	C	1989																								
にいのち総合支援	C	2000																								
富山視覚総合支援	C	1956																								
富大附属特別支援	C	1978																								
富山総合支援	E	2013																								
富山総合支援	Es	1968																								
しらひ支援	Es	1978																								
高志支援	Es	1978																								
こまどり支援	F	1968																								
高岡支援	F	1969																								
ふるさと支援	F	1978																								
富山聴覚総合支援	F	1996																								
びなみ総合支援	G	1983																								
高岡高等支援	G	2013																								

図 20 特別支援学校の校歌の調性・音域

特別支援学校の校歌の調性は、C Dur (ハ長調) が最も多い 5 校で、次いで F Dur (ヘ長調) の 4 校、3 番目は Es Dur (変ホ長調) の 3 校、4 番目が G Dur (ト長調) の 2 校だった。最低音は C¹ (1点ハ) が 7 校で最も多く、次いで B⁰ (変ロ) の 3 校だった。最高音は D² (2点ニ) の 9

校が最も多く、次いでC² (2点ハ) の3校だった。

(2) 高等専門学校の校歌の調性と音域

高等専門学校の校歌の調性は支援3校すべてがB Dur (変ロ長調) である。このうち、旧富山工業高等専門学校と旧富山商船高等専門学校の校歌は、B Dur (変ロ長調) を好んだ小澤慎一郎の作曲である。音域は、最低音が3校ともB⁰ (変ロ) で、最高音はD² (2点ニ) が2校、C² (2点ハ) が1校だった。

学校名	調性	制定	音域																							
			G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2
富山商船高专	B	1970																								
富山工業高专	B	1974																								
富山高専	B	2009																								

図 21 高等専門学校の校歌の調性・音域

(3) 旧制学校・新制大学等の校歌の調性と音域

旧制学校・新制大学等の校歌の調性は、C Dur (ハ長調) が最も多い4校で、次いでD Dur (ニ長調) とF Dur (ヘ長調) が同数で3校だった。最低音はC¹ (1点ハ) が最も多い7校、最高音はD² (2点ニ) が6校で最も多く、4校のD² (2点ニ) がこれに続く。

学校名	調性	制定	音域																							
			G0	G#0	A0	A#0	H0	C1	C#1	D1	D#1	E1	F1	F#1	G1	G#1	A1	A#1	H1	C2	C#2	D2	D#2	E2	F2	F#2
富山師範学校	C	1923																								
高岡高等商業	C	1929																								
新潟高等商業	C	1929																								
富山大学	C	1964																								
富山女子短大	D	1964																								
大谷技術短大	D	1966																								
農業専門学校	D	不詳																								
富山高 第一校歌	Es	不詳																								
保育専門学校	F	1960																								
高等職業訓練校	F	1971																								
富山商船高	F	不詳																								
富山高 第二校歌	G	不詳																								

図 22 旧制学校・新制大学等の校歌の調性・音域

4. ヨナ抜き音階の割合

(1) 小学校

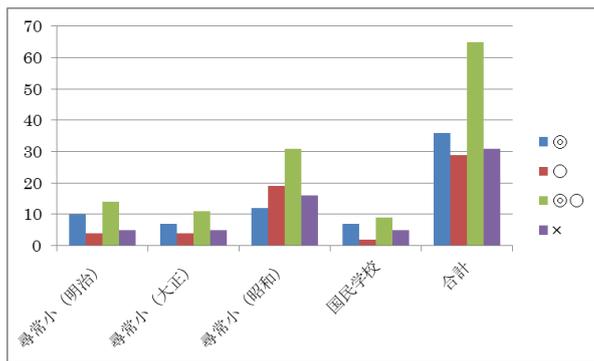
①旧制小・国民学校の時代

旧制小・国民学校の時代の校歌は、ヨナ抜き音階を用いたものが多い。明治・大正・昭和の旧制小学校、昭和の国民学校の順にその割合を見ていくと、時代が進むにしたがってヨナ抜き音階の割合が減り、逆に7音音階の割合が増えている。

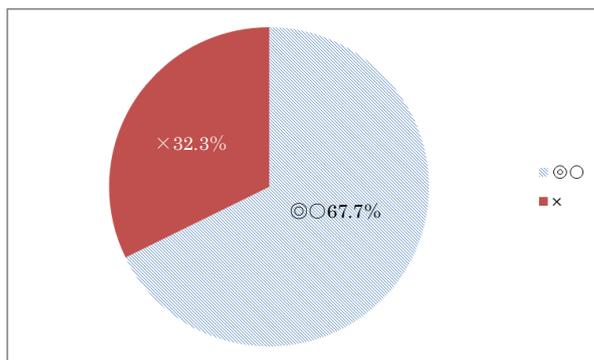
ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
尋常小(明治)	10	4	14	5	19
尋常小(大正)	7	4	11	5	16
尋常小(昭和)	12	19	31	16	47
国民学校	7	2	9	5	14
合計	36	29	65	31	96

表 19 旧制小・国民学校の時代の校歌のヨナ抜き音階使用数

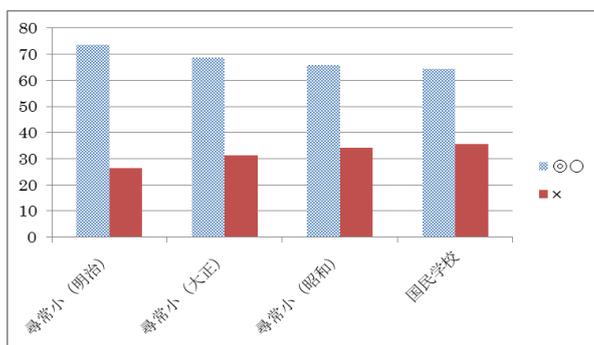
(◎はヨナ抜き音階、○はそれに準じるもの=faやsiが一回しか出てこない、×はヨナ抜き音階でないもの)



グラフ 38 旧制小・国民学校の時代の校歌のヨナ抜き音階使用数の推移



グラフ 39 旧制小・国民学校の時代の校歌のヨナ抜き音階使用割合

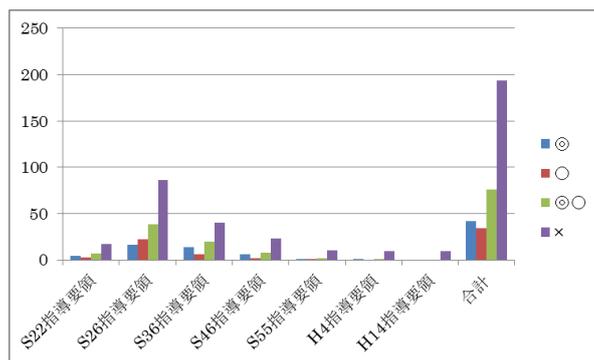


グラフ 40 旧制小・国民学校の時代の校歌のヨナ抜き音階使用割合の推移 (%)

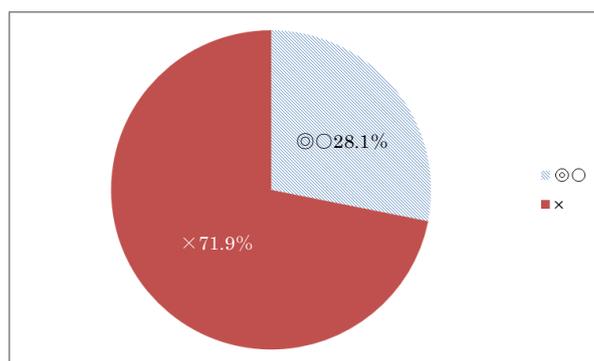
②新制小学校の時代

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
S22 指導要領	4	3	7	17	24
S26 指導要領	16	22	38	86	124
S36 指導要領	14	6	20	40	60
S46 指導要領	6	2	8	23	31
S55 指導要領	1	1	2	10	12
H4 指導要領	1	0	1	9	10
H14 指導要領	0	0	0	9	9
合計	42	34	76	194	270

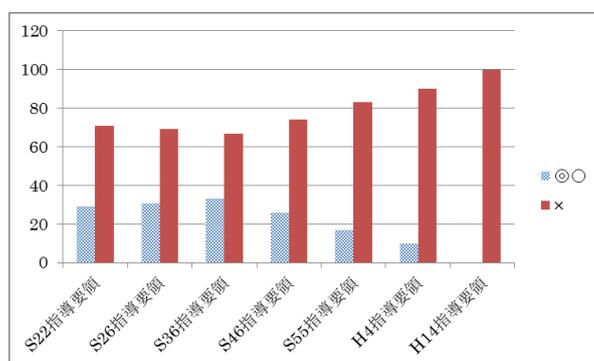
表 20 新制小学校の校歌のヨナ抜き音階使用数



グラフ 41 新制小学校の校歌のヨナ抜き音階使用数の推移



グラフ 42 新制小学校の校歌のヨナ抜き音階使用割合



グラフ 43 新制小学校の校歌のヨナ抜き音階使用割合の推移 (%)

新制小学校の時代になると、ヨナ抜き音階の割合は旧制の時代と比較して 67.7%から 28.1%へとさらに減少する。この割合を学習指導要領の区分で追うと、時代が新しくなるにしたがって 7 音音階の割合が増え、ヨナ抜き音階が少数派になっている。

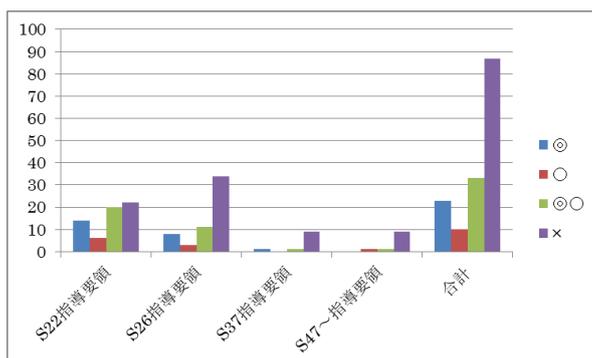
明治時代からのヨナ抜き音階は、旧制新制問わずいずれの時代も時代が新しくなるにしたがって減少していき、平成 14 年度版学習指導要領の時代になるとついに姿を消す。

(2) 中学校

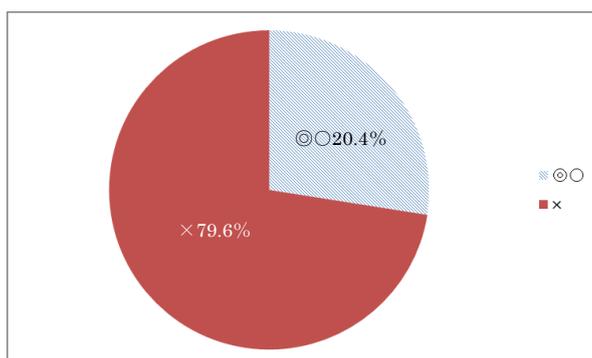
昭和 22 年度版学習指導要領の時代までは、ヨナ抜き音階と 7 音階の割合は拮抗していたが、その後はヨナ抜き音階が次第に減少し、7 音音階が主流になっていく。昭和 37 年の学習指導要領の時代以降になると、ヨナ抜き音階はほとんど姿を消している。

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
S22 指導要領	14	6	20	22	62
S26 指導要領	8	3	11	34	78
S37 指導要領	1		1	9	11
S47～指導要領		1	1	9	11
合計	23	10	33	87	162

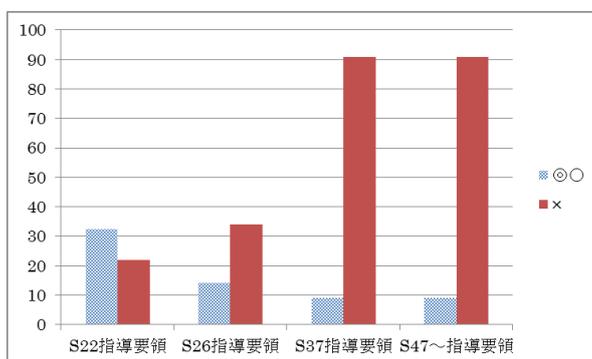
表 21 新制中学校の校歌のヨナ抜き音階使用数



グラフ 44 新制中学校の校歌のヨナ抜き音階使用数の推移



グラフ 45 新制中学校の校歌のヨナ抜き音階使用割合



グラフ 46 新制中学校の校歌のヨナ抜き音階使用割合の推移 (%)

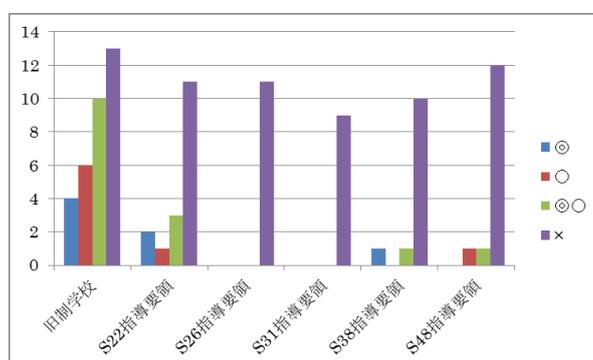
(3) 旧制学校・新制高等学校

旧制学校の場合の時代から、ヨナ抜き音階より 7 音音階の割合が高く、昭和 26 年度及び昭和 31 年度版学習指導要領の時代になると姿を消している。昭和 38 年度以降も、大部分が 7 音音

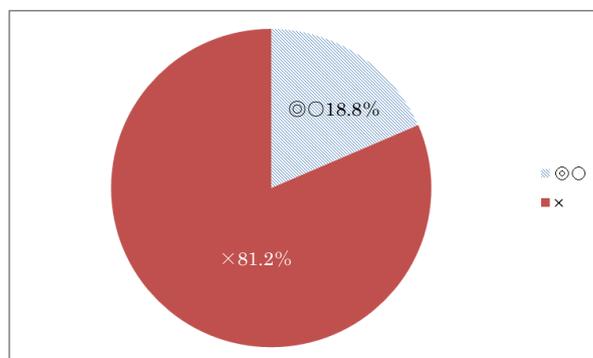
階で、他の校種とは傾向が異なっている。

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制学校	4	6	10	13	23
S22 指導要領	2	1	3	11	13
S26 指導要領				11	11
S31 指導要領				9	9
S38 指導要領	1		1	10	11
S48 指導要領		1	1	12	13
合計	7	8	15	66	80

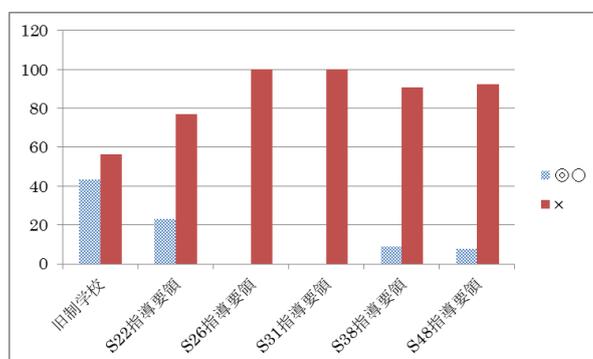
表 22 旧制学校・新制高等学校の校歌のヨナ抜き音階使用数



グラフ 47 旧制学校・新制高等学校の校歌のヨナ抜き音階使用数の推移



グラフ 48 旧制学校・新制高等学校の校歌のヨナ抜き音階使用割合



グラフ 49 旧制学校・新制高等学校の校歌のヨナ抜き音階使用割合の推移 (%)

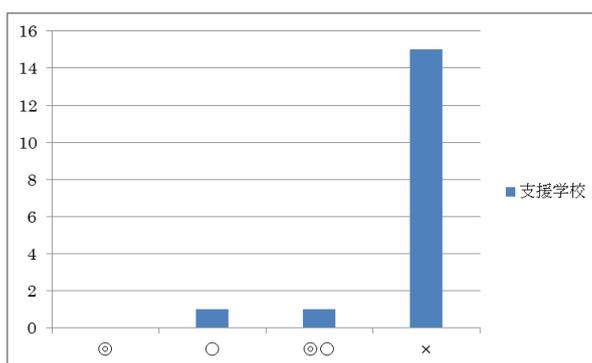
(4) 特別支援学校等

①特別支援学校

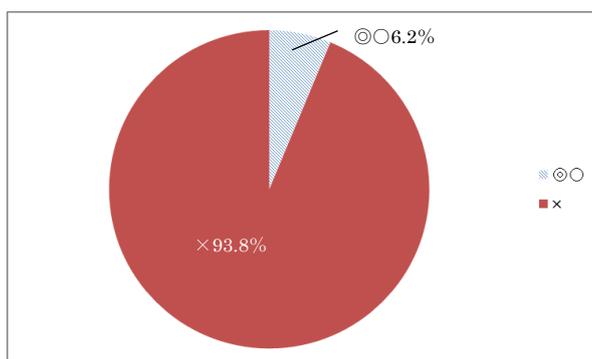
特別支援学校の場合、全 16 校のうちヨナ抜き音階が用いられていたのは 1 校のみで、それも fa が 1 回だけ用いられているヨナ抜き音階であった。その他はすべて 7 音音階で、小・中学校とは傾向が異なっていた。

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
特別支援学校		1	1	15	16

表 23 旧制学校・新制高等学校の校歌のヨナ抜き音階使用数



グラフ 50 特別支援学校の校歌のヨナ抜き音階使用数



グラフ 51 特別支援学校の校歌のヨナ抜き音階使用割合

②高等専門学校

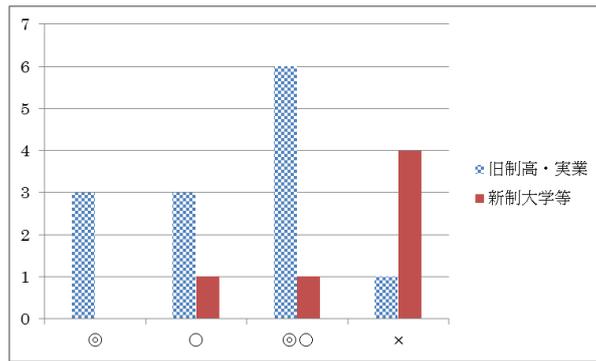
高等専門学校は、3 校とも 7 音音階であった。

③旧制高等学校・実業学校・新制大学等

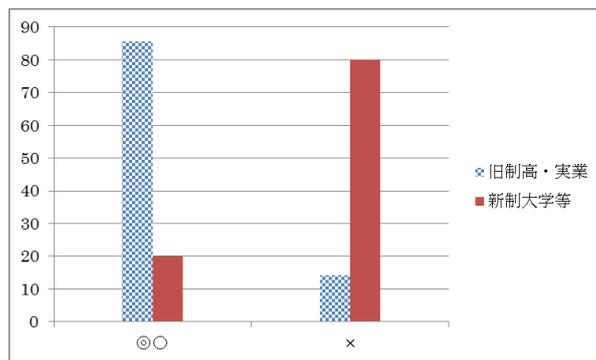
旧制の時代に作られた校歌では、全 7 校中 6 校がヨナ抜き音階（◎3、○3）であった。新制では、全 5 校中 1 校がヨナ抜き音階（○1）で、1966 年に制定されたものだった。この校種では、旧制と新制でヨナ抜き音階の使用傾向が逆転している。

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制高・実業	3	3	6	1	7
新制大学等		1	1	4	5

表 24 旧制高・実業学・新制大学等の校歌のヨナ抜き音階使用数



グラフ 52 旧制高等学校・実業学校・新制大学等の校歌のヨナ抜き音階使用数



グラフ 53 旧制高等学校・実業学校・新制大学等の校歌のヨナ抜き音階使用数の推移 (%)

5. 主な作曲者の調性及びヨナ抜き音階の割合

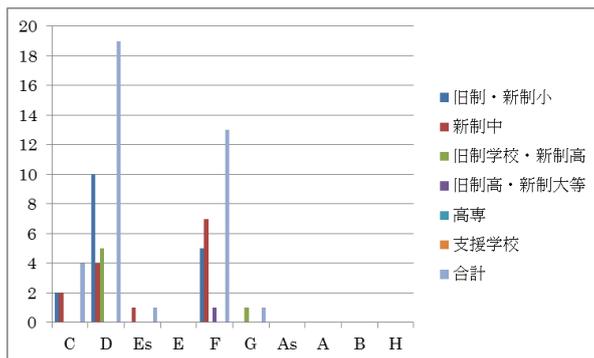
(1) 福井直秋 (1877~1963)

福井直秋の校歌は、D Dur (ニ長調) が最も多く、全体の 50%にあたる 19 校だった。これは、ほかの作曲者と大きく異なる傾向である。次いで多かった調性はF Dur (ヘ長調) の 13 校で、全体の 34.3%にあたる。あとはC Dur (ハ長調)、Es Dur (変ホ長調)、G Dur (ト長調) が数校ずつあるが、D Dur (ニ長調) とF Dur (ヘ長調) で 84.3%と、この 2 種類で大部分を占める。

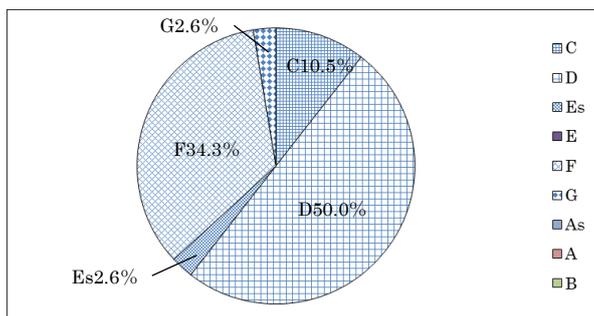
ヨナ抜き音階は、旧制・新制小学校ではヨナ抜き音階よりも 7 音音階の方が多く、その数は約 2 倍になっている。新制中学校では、その割合が逆転し、ヨナ抜き音階が多くなる。旧制学校・新制高等学校では割合は半々になっている。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	2	10			5						17
新制中	2	4	1		7						14
旧制学校・新制高		5				1					6
旧制高・新制大等					1						1
高等専門学校											
特別支援学校											
合計	4	19	1		13	1					38

表 25 福井直秋の調性の傾向



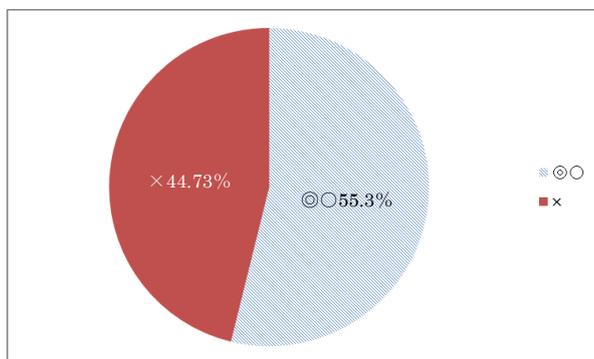
グラフ 54 福井直秋の調性の傾向



グラフ 55 福井直秋の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小	5	1	6	11	17
新制中	8	2	10	4	14
旧制学校・新制高	1	2	3	3	6
旧制高・新制大等	1		1		1
高等専門学校					
特別支援学校					
合計	15	6	21	18	38

表 26 福井直秋のヨナ抜き音階使用数



グラフ 56 福井直秋のヨナ抜き音階の割合

(2) 信時潔 (1887~1965)

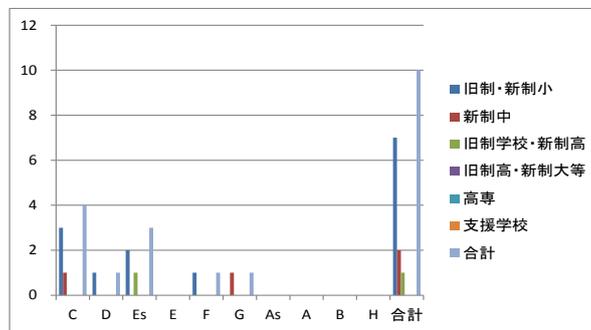
信時潔の校歌は、C Dur (ハ長調) が最も多く、全体の 40%にあたる 4 曲であった。次いで

Es Dur (変ホ長調) が多く、全体の 30%にあたる 3 曲であった。

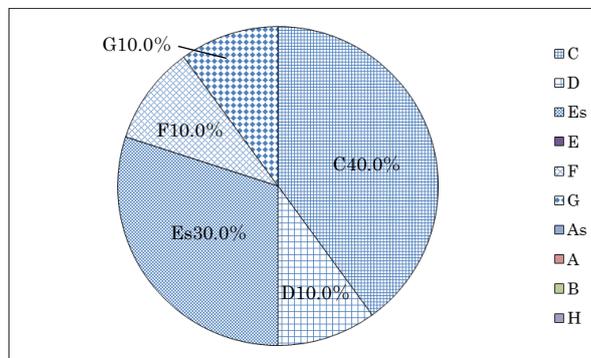
ヨナ抜き音階の割合は、全体の 30%と比較的用いられているが 7 音音階の方が多。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	3	1	2		1						7
新制中	1					1					2
旧制学校・新制高			1								1
旧制高・新制大等											
高等専門学校											
特別支援学校											
合計	4	1	3		1	1					10

表 27 信時潔の調性の傾向



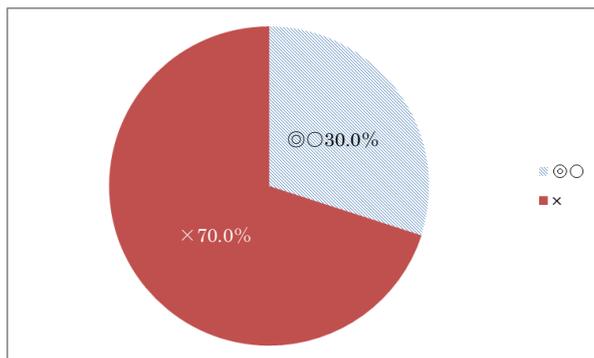
グラフ 57 信時潔の調性の傾向



グラフ 58 信時潔の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小		2	2	5	7
新制中		1	1	1	2
旧制学校・新制高				1	1
旧制高・新制大等					
高等専門学校					
特別支援学校					
合計		3	3	7	10

表 28 信時潔のヨナ抜き音階使用数



グラフ 59 信時潔のヨナ抜き音階の割合

(3) 荒木得三 (1891~1952)

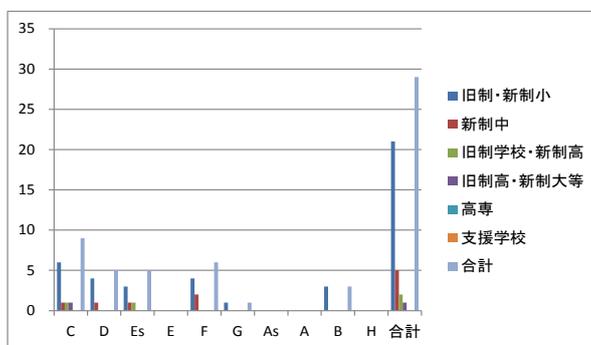
荒木得三の校歌は、C Dur (ハ長調) が最も多く、全体の 31%にあたる 9 曲であった。次いでF Dur (ヘ長調) が全体の 20.9%にあたる 6 曲、D Dur (ニ長調) とEs Dur (変ホ長調) が全体の 17.2%にあたる 5 曲であった。また、B Dur (変ロ長調) も 3 曲あり、全体の 10.3%であった。また、D Dur (ニ長調)、Es Dur (変ホ長調)、B Dur (変ロ長調) といったその後あまり用いられなくなる調性が一定数用いられている。

荒木が活躍した時代の校歌は、このようにさまざまな調性が用いられる傾向がある。

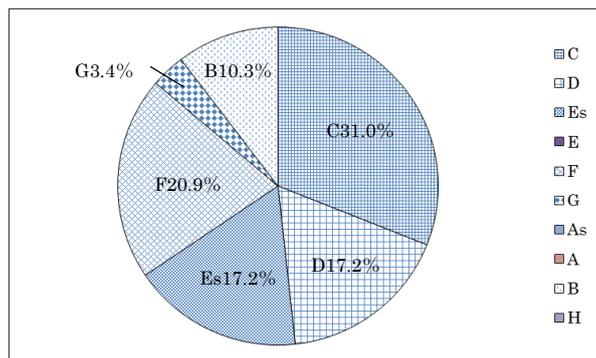
ヨナ抜き音階の割合は、旧制小・新制小はヨナ抜き音階の方が多いが、新制中学校はほぼ同数、旧制中・実業・新制高等学校は 2 曲とも 7 音音階である。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	6	4	3		4	1			3		21
新制中	1	1	1		2						5
旧制学校・新制高	1		1								2
旧制高・新制大等	1										1
高等専門学校											
特別支援学校											
合計	9	5	5		6	1			3		29

表 29 荒木得三の調性の傾向



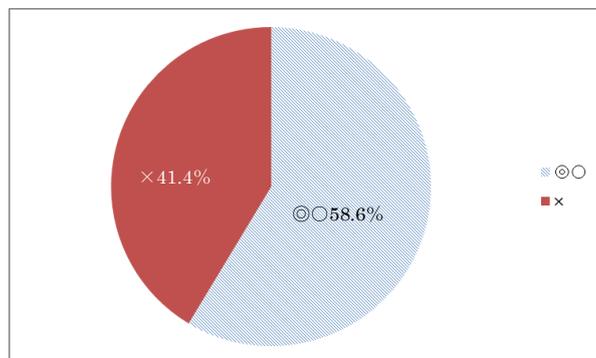
グラフ 60 荒木得三の調性の傾向



グラフ 61 荒木得三の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小	8	6	14	7	21
新制中	2		2	3	5
旧制学校・新制高				2	2
旧制高・新制大等		1	1		1
高専					
特別支援学校					
合計	10	7	17	12	29

表 30 荒木得三のヨナ抜き音階使用数

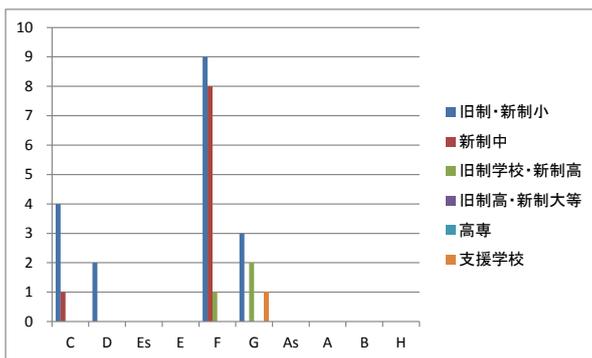


グラフ 62 荒木得三のヨナ抜き音階の割合

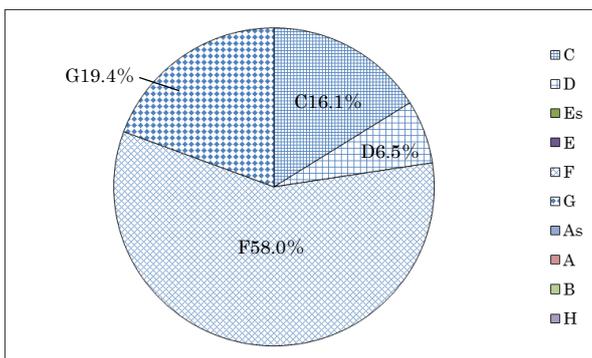
(4) 室崎琴月 (1891~1977)

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	4	2			9	3					18
新制中	1				8						9
旧制学校・新制高					1	2					3
旧制高・新制大等											
高専											
特別支援学校						1					1
合計	5	2			18	6					31

表 31 室崎琴月の調性の傾向



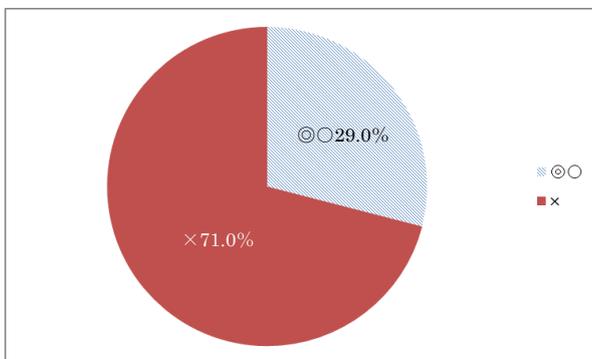
グラフ 63 室崎琴月の調性の傾向



グラフ 64 室崎琴月の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小	2	6	8	10	18
新制中		1	1	8	9
旧制学校・新制高					
旧制高・新制大等				3	3
高専					
特別支援学校				1	1
合計	2	7	9	22	31

表 32 室崎琴月のヨナ抜き音階使用数



グラフ 65 室崎琴月のヨナ抜き音階の割合

室崎琴月の校歌は、C Dur（ハ長調）、D Dur（ニ長調）、F Dur（ヘ長調）、G Dur（ト長調）

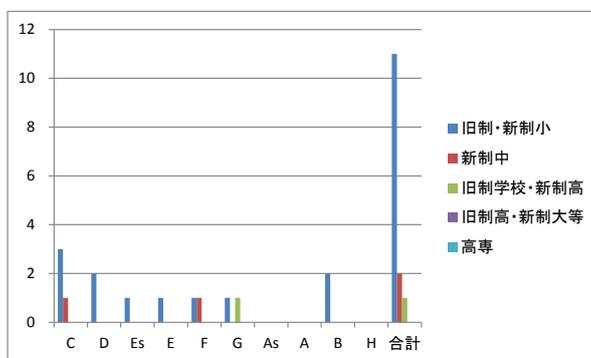
で作曲されており、Es Dur (変ホ長調) やB Dur (変ロ長調) もあるほかの同時代の作曲家とは傾向を異にしている。なかでもF Dur (へ長調) が最も多く、全体の 58%にあたる 18 曲を占めている。次いで多かったのはG Dut (ト長調) で、全体の 19.4%にあたる 6 曲であった。3 番目はC Dur (ハ長調) で、全体の 16.1%にあたるの曲であった。4 番目はD Dur (ニ長調) の 2 曲で、全体の 6.5%だった。

音階について見る、旧制小・新制小ではヨナ抜き音階及びヨナ抜き音階と見なせる曲は 8 曲で、7 音音階は 10 曲となっている。新制中学校以上になると、7 音音階をもちいた曲が大部分であった。全体では、ヨナ抜き音階が 29%にあたる 9 曲、7 音音階が 71%にあたる 22 曲であった。

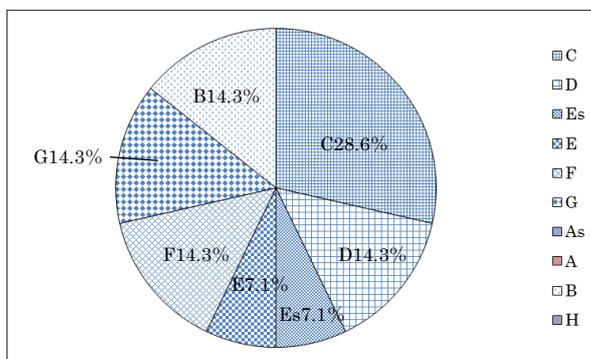
(5) 橋本秀次 (1905～1963)

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	3	2	1	1	1	1			2		11
新制中	1				1						2
旧制学校・新制高						1					1
旧制高・新制大等											
高専											
特別支援学校											
合計	4	2	1	1	2	2			2		14

表 33 橋本秀次の調性の傾向



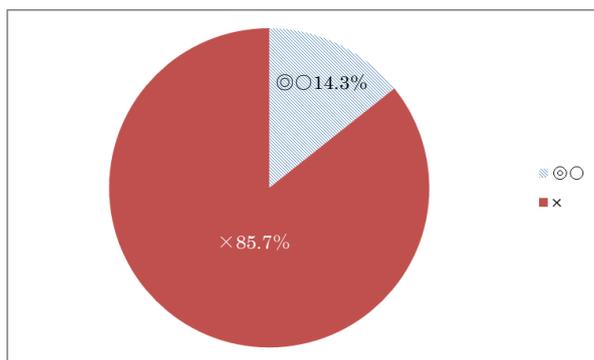
グラフ 66 橋本秀次の調性の傾向



グラフ 67 橋本秀次の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小	1	1	2	9	11
新制中				2	2
旧制学校・新制高				1	1
旧制高・新制大等					
高等専門学校					
特別支援学校					
合計	1	1	1	14	14

表 34 橋本秀次のヨナ抜き音階使用数



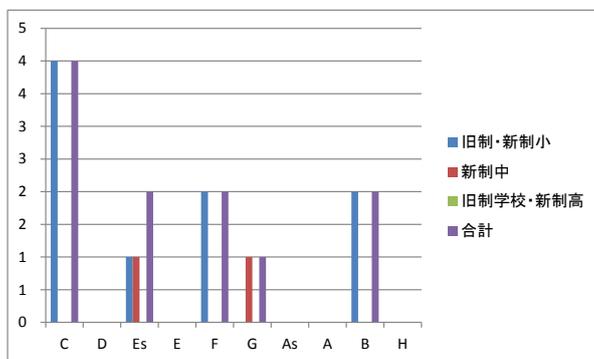
グラフ 68 橋本秀次のヨナ抜き音階の割合

橋本秀次の校歌は、C Dur (ハ長調) が 4 曲、D Dur (ニ長調)、F Dur (ヘ長調)、G Dur (ト長調)、B Dur (変ロ長調) が各 2 曲、Es Dur (変ホ長調)・E Dur (ホ長調) が各 1 曲であった。音階は、ほとんどが 7 音音階であった。

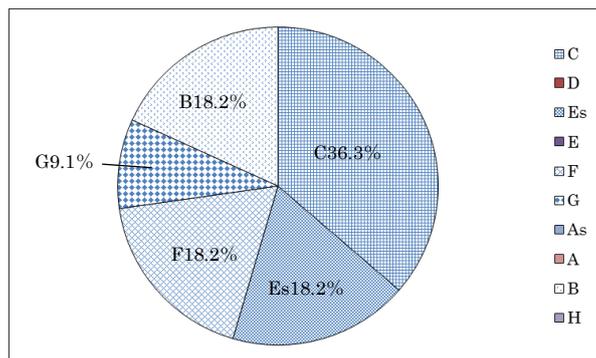
(6) 小澤達三 (1907~1981)

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	4		1		2				2		9
新制中			1			1					2
旧制学校・新制高											
合計	4		2		2	1			2		11

表 35 小澤達三の調性の傾向



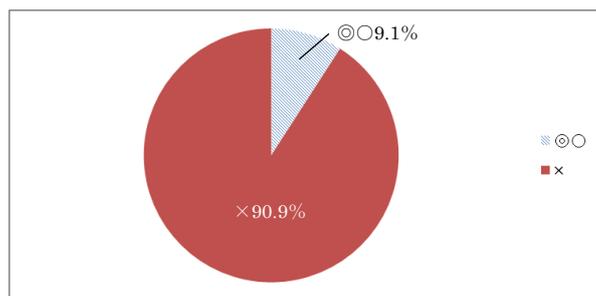
グラフ 69 小澤達三の調性の傾向



グラフ 70 小澤達三の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小		1	1	8	9
新制中				2	2
旧制学校・新制高					
合計		1	1	10	11

表 36 小澤達三のヨナ抜き音階使用数



グラフ 71 小澤達三のヨナ抜き音階の割合

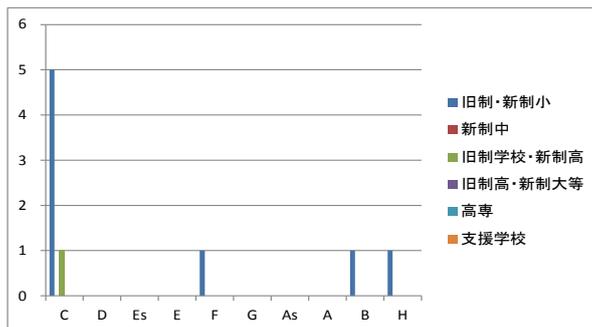
小澤達三の校歌は、C Dur（ハ長調）が全体の 36.3%にあたる 4 曲で、2 曲のEs Dur（変ホ長調）、G Dur（ト長調）、B Dur（変ロ長調）がこれに続く。G Dur（ト長調）は 1 曲のみである。

音階は 7 音階が多く、全体の 9 割を超えている。

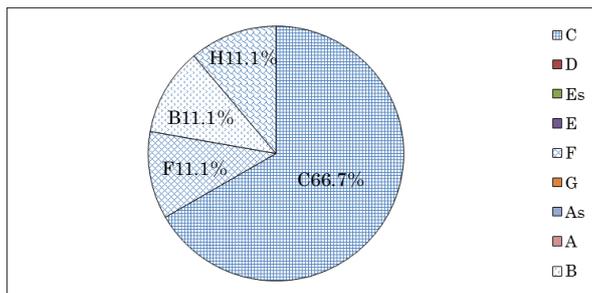
(7) 古瀬紋吉 (1910~?)

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	5				1				1	1	8
新制中											
旧制学校・新制高	1										1
旧制高・新制大等											
高等専門学校											
特別支援学校											
合計	6				1				1	1	9

表 37 古瀬紋吉の調性の傾向



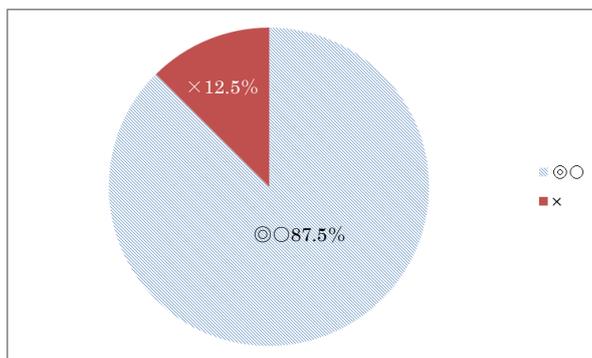
グラフ 72 古瀬紋吉の調性の傾向



グラフ 73 古瀬紋吉の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小	4	3	7	1	8
新制中					
旧制学校・新制高	1		1		1
合計	5	3	8	1	9

表 38 古瀬紋吉のヨナ抜き音階使用数



グラフ 74 古瀬紋吉のヨナ抜き音階の割合

古瀬紋吉の校歌は、C Dur (ハ長調) が 6 曲、F Dur (へ長調)、B Dur (変ロ長調)、H Dur (ロ長調) が各 1 曲であった。♯が 5 個つくロ長調は大変珍しい。

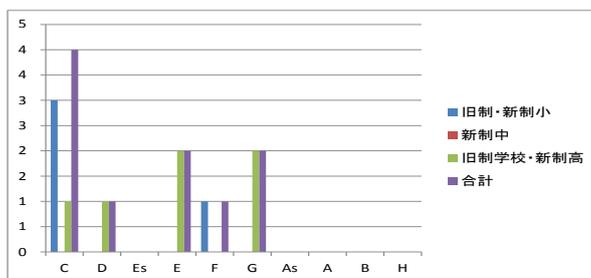
音階は、ほとんどがヨナ抜き音階であった。

(8) 岡野貞一 (1910～1941)

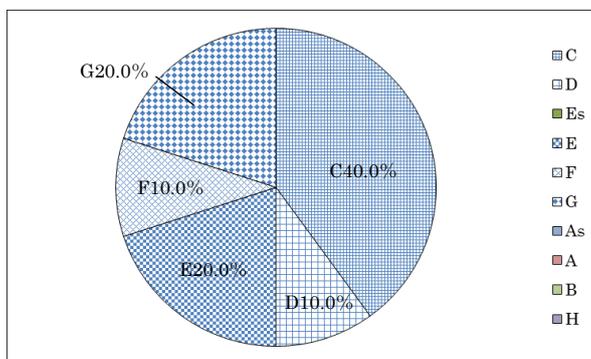
岡野貞一の校歌は、C Dur (ハ長調) が 4 曲、E Dur (ホ長調) と G Dur (ト長調) が各 2 曲、D Dur (ニ長調) と F Dur (へ長調) が各 1 曲だった。E Dur (ホ長調) はともに高等女学校の校歌である。音階は、ほとんどが 7 音音階だった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	3				1						4
新制中											
旧制学校・新制高	1	1		2		2					6
合計	4	1		2	1	2					10

表 39 岡野貞一の調性の傾向



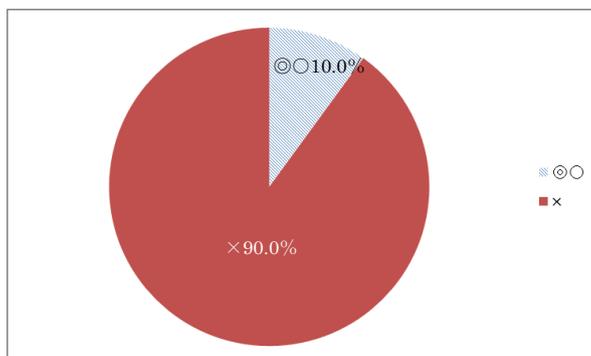
グラフ 75 岡野貞一の調性の傾向



グラフ 76 岡野貞一の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小		1	1	3	4
新制中					
旧制学校・新制高				6	6
合計		1	1	9	10

表 40 岡野貞一のヨナ抜き音階使用数



グラフ 77 岡野貞一のヨナ抜き音階の割合

(9) 黒坂富治 (1910～1994)

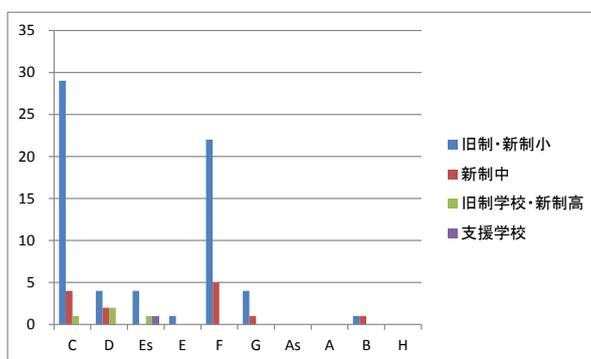
黒坂富治の校歌は、C Dur (ハ長調) が最も多く、全体の 41.1%にあたる 34 曲であった。次いで多かったのはF Dur (ヘ長調) で、全体の 32.5%にあたる 27 曲であった。3 番目はD Dur (ニ長調) で、全体の 9.6%にあたる 8 曲であった。4 番目はEs Dur (変ホ長調) で、7.2%にあたる 6 曲、5 番目がG Durで、6%にあたる 5 曲だった。ほかには、B Dur (変ロ長調) が 2 曲あった。

音階は、ほとんどがヨナ抜き音階で、ヨナ抜き音階とヨナ抜き音階と見なせるものを合わせると 92.8%にあたる 77 曲になる。7 音音階は 7.2%にあたる 6 曲しかない。この傾向は、初期の頃から最後の方に至るまで変わらない。

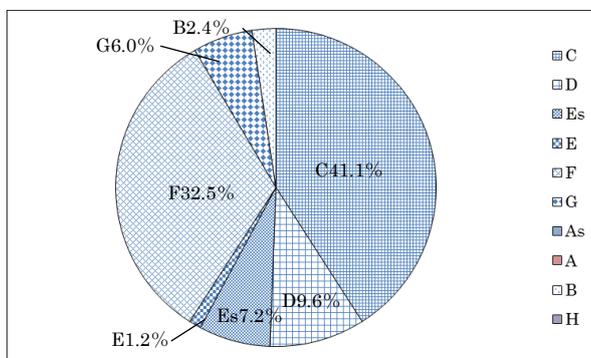
黒坂富治は、好んでヨナ抜き音階を用いた作曲家といえるだろう。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	29	4	4	1	22	4			1		65
新制中	4	2			5	1			1		13
旧制学校・新制高	1	2	1								4
特別支援学校			1								1
合計	34	8	6	1	27	5			2		83

表 41 黒坂富治の調性の傾向



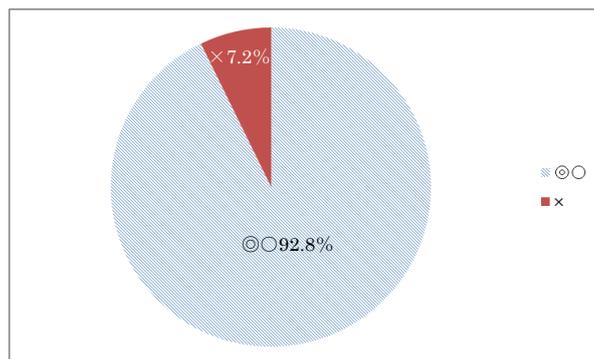
グラフ 78 黒坂富治の調性の傾向



グラフ 79 黒坂富治の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小	35	25	60	5	65
新制中	9	3	12	1	13
旧制学校・新制高	3	1	4		4
特別支援学校		1	1		1
合計	47	30	77	6	83

表 42 黒坂富治のヨナ抜き音階使用数



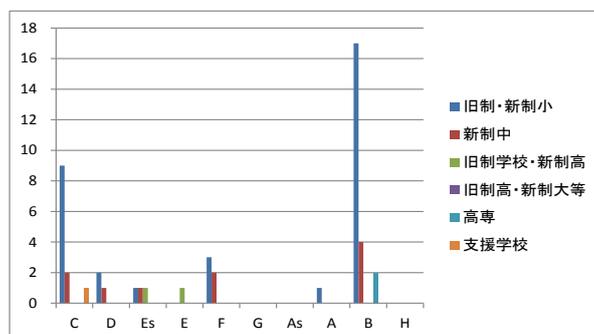
グラフ 80 黒坂富治のヨナ抜き音階の割合

(10) 小澤慎一郎 (1913～1985)

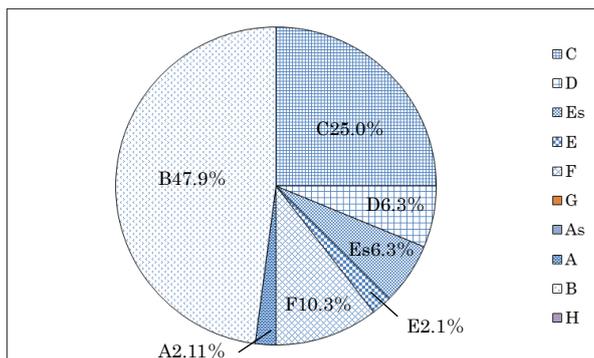
小澤慎一郎の校歌は、B Dur (変口長調) が大変多く、全体の 47.9%にあたる 23 曲であった。次いで多かったのはC Dur (ハ長調) で、全体の 25%にあたる 12 曲であった。音階は、ほとんどが 7 音音階であった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	9	2	1		3			1	17		33
新制中	2	1	1		2				4		10
旧制学校・新制高			1	1							2
旧制高・新制大等											
高等専門学校									2		2
特別支援学校	1										1
合計	12	3	3	1	5			1	23		48

表 43 小澤慎一郎の調性の傾向



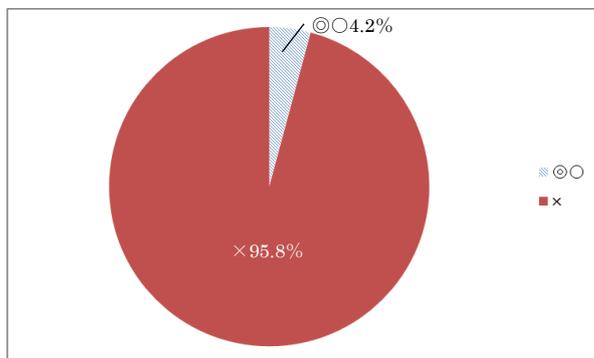
グラフ 81 小澤慎一郎の調性の傾向



グラフ 82 小澤慎一郎の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小	1	1	2	31	33
新制中				10	10
旧制学校・新制高				2	2
旧制高・新制大等					
高等専門学校				2	2
特別支援学校				1	1
合計	1	1	2	46	48

表 44 小澤慎一郎のヨナ抜き音階使用数



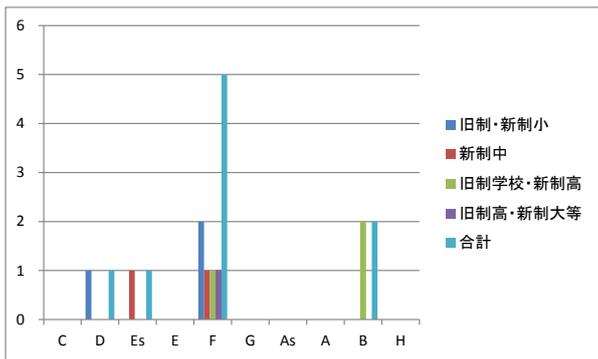
グラフ 83 小澤慎一郎のヨナ抜き音階の割合

(11) 松本民之助 (1914～2004)

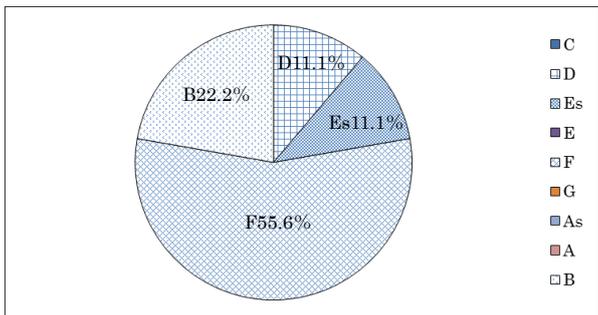
松本民之助の校歌は、F Dur (へ長調) が 5 曲で最も多く、B Dur (変ロ長調) が 2 曲、D Dur (ニ長調) と Es Dur (変ホ長調) が各 1 曲だった。音階はすべて 7 音音階であった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小		1			2						3
新制中			1		1						2
旧制学校・新制高					1				2		3
旧制高・新制大等					1						1
合計		1	1		5				2		9

表 45 松本民之助の調性の傾向



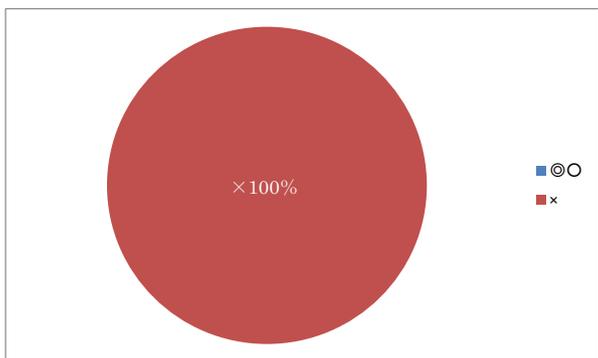
グラフ 84 松本民之助の調性の傾向



グラフ 85 松本民之助の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小				3	3
新制中				2	2
旧制学校・新制高				1	1
旧制高・新制大等				3	3
合計				9	9

表 46 松本民之助のヨナ抜き音階使用数



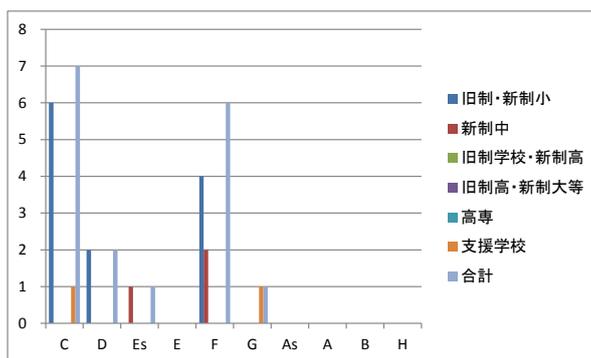
グラフ 86 松本民之助のヨナ抜き音階の割合

(12) 大澤欽治 (1921～2007)

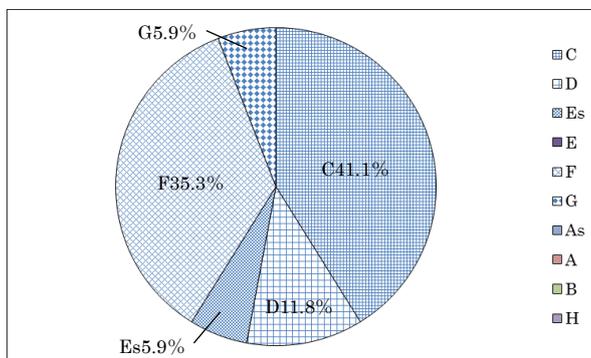
大澤欽治の校歌は、C Dur (ハ長調) が全体の 41.1%にあたる 7 曲で最も多く、次いでF Dur (ヘ長調) が全体の 35.3%にあたる 6 曲だった。ほかには、D Dur (ニ長調) の 2 曲、Es Dur (変ホ長調) とG Dur (ト長調) が各 1 曲だった。音階は、すべて 7 音音階であった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	6	2			4						12
新制中			1		2						3
旧制学校・新制高											
旧制高・新制大等											
高等専門学校											
特別支援学校	1					1					2
合計	7	2	1		6	1					17

表 47 松本民之助の調性の傾向



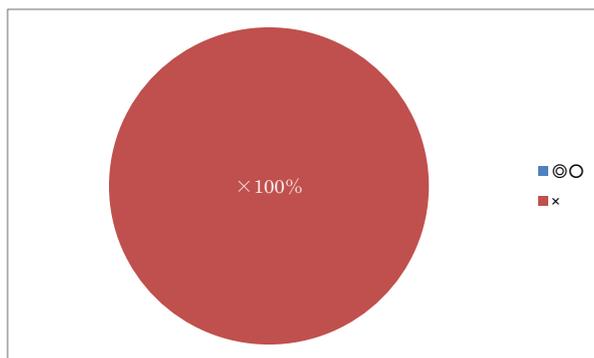
グラフ 87 大澤欽治の調性の傾向



グラフ 88 大澤欽治の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小				12	12
新制中				3	3
旧制学校・新制高					
旧制高・新制大等					
高等専門学校					
特別支援学校				2	2
合計				17	17

表 48 大澤欽定のヨナ抜き音階使用数

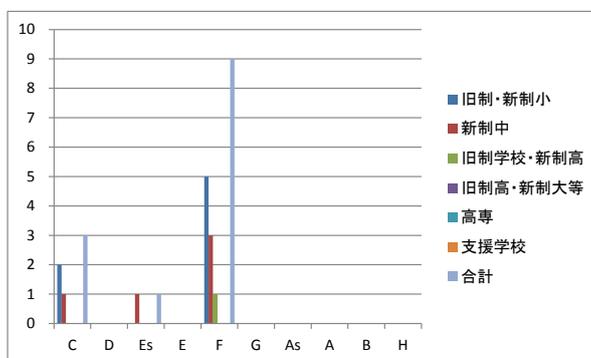


グラフ 89 大澤欽治のヨナ抜き音階の割合

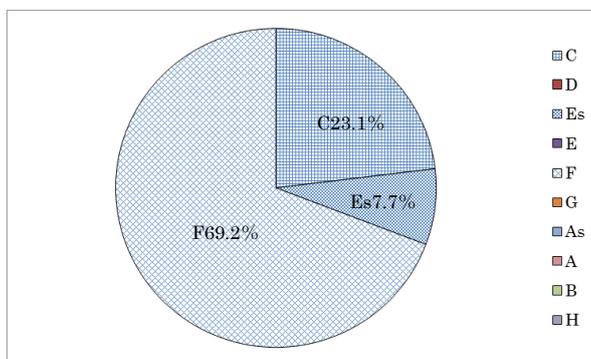
(13) 岩河三郎 (1923～2013)

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	2				5						7
新制中	1		1		3						5
旧制学校・新制高					1						1
旧制高・新制大等											
高等専門学校											
特別支援学校											
合計	3		1		9						13

表 49 岩河三郎の調性の傾向



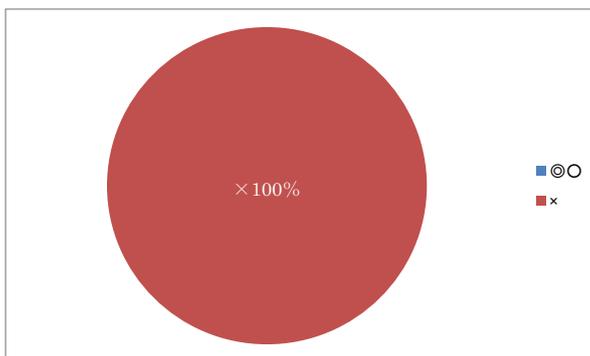
グラフ 90 岩河三郎の調性の傾向



グラフ 91 岩河三郎の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小				7	7
新制中				5	5
旧制学校・新制高				1	1
旧制高・新制大等					
高等専門学校					
特別支援学校					
合計				13	13

表 50 岩河三郎のヨナ抜き音階使用数



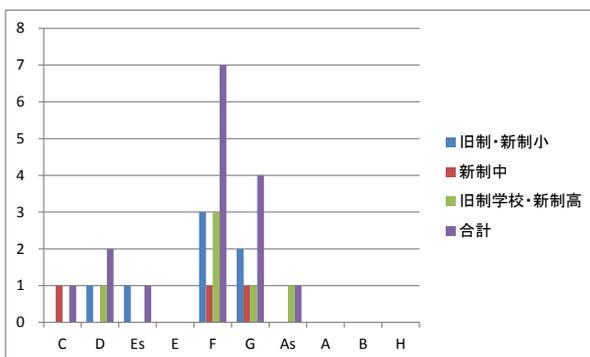
グラフ 92 岩河三郎のヨナ抜き音階の割合

岩河三郎の校歌の調性は3種類のみで、F Dur (へ長調) が最も多い9曲、C Dur (ハ長調) が3曲、Es Dur (変ホ長調) が1曲であった。このEs Dur (変ホ長調) の校歌は、奈古中学校の校歌で、制定年が1975年と比較的新しいものである。音階は、すべて7音音階であった。

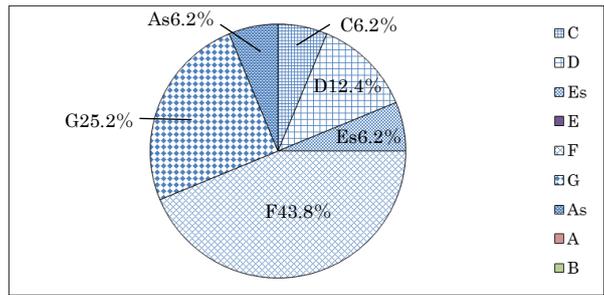
(14) 團伊玖磨 (1924~2001)

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小		1	1		3	2					7
新制中	1				1	1					3
旧制学校・新制高		1			3	1	1				6
合計	1	2	1		7	4	1				16

表 51 團伊玖磨の調性の傾向



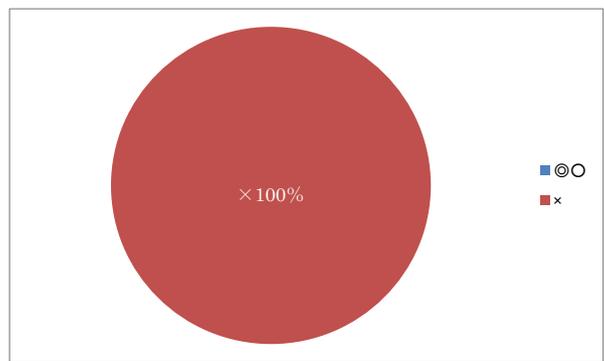
グラフ 93 團伊玖磨の調性の傾向



グラフ 94 團伊玖磨の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小				7	7
新制中				3	3
旧制学校・新制高				6	6
合計				16	16

表 52 團伊玖磨のヨナ抜き音階使用数



グラフ 95 團伊玖磨のヨナ抜き音階の割合

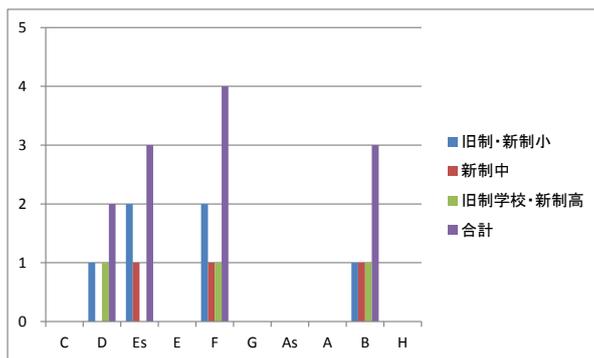
團伊玖磨の校歌は、F Dur（へ長調）が全体の 43.8%にあたる 7 曲で最も多く、次いでG Dur（ト長調）が全体の 25.2%にあたる 4 曲、ほかはD Dur（ニ長調）2 曲、Es Dur（変ホ長調）とAs Dur（変ホ長調）が各 1 曲であった。音階は、すべて 7 音音階であった。

(15) 宮下舜爾（1925～2007）

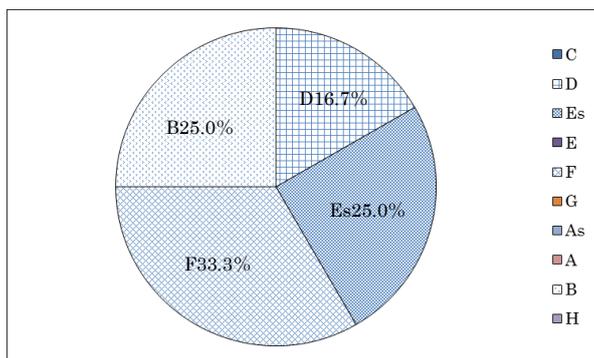
宮下舜爾の校歌は、F dur（へ長調）が 4 曲、Es Dur（変ホ長調）とB Dur（変ロ長調）がともに 3 曲、D Dur（ニ長調）が 2 曲であった。b 系の調性が全 12 曲中 9 曲で、75%を占める。したがって、宮下はb 系の調性を好んだ作曲家といえるかもしれない。音階は、すべて 7 音音階である。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小		1	2		2				1		6
新制中			1		1				1		3
旧制学校・新制高		1			1				1		3
合計		2	3		4				3		12

表 53 宮下舜爾の調性の傾向



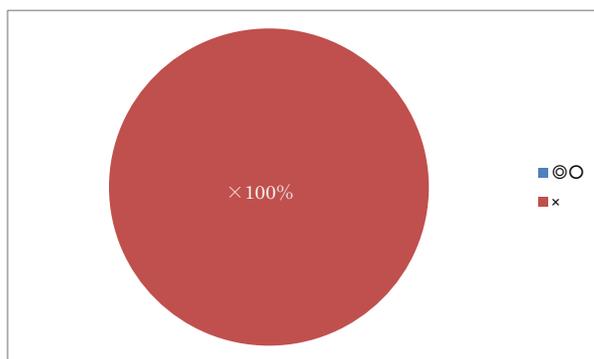
グラフ 96 宮下舜爾の調性の傾向



グラフ 97 宮下舜爾の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎	○	◎○	×	合計
旧制・新制小				6	6
新制中				3	3
旧制学校・新制高				3	3
合計				12	12

表 54 宮下舜爾のヨナ抜き音階使用数



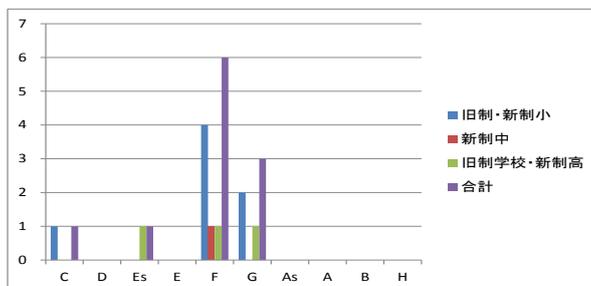
グラフ 98 宮下舜爾のヨナ抜き音階の割合

(16) 佐藤進 (1934～)

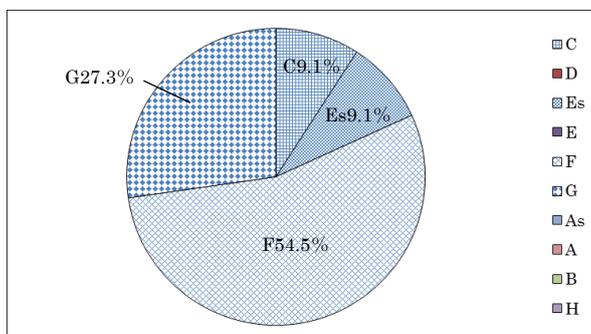
佐藤進の校歌は、F Dur (へ長調) が最も多く 6 曲であった。ほかには、G Dur (ト長調) が 3 曲、C Dur (ハ長調) と Es Dur (変ホ長調) が各 1 曲であった。音階は、すべてが 7 音音階であった。

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	1				4	2					7
新制中					1						1
旧制学校・新制高			1		1	1					3
合計	1		1		6	3					11

表 55 佐藤進の調性の傾向



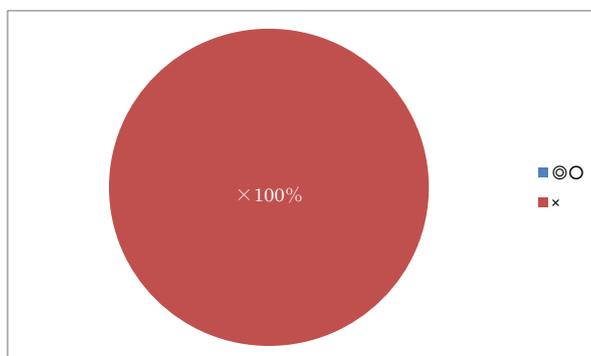
グラフ 100 佐藤進の調性の傾向



グラフ 102 佐藤進の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎○	×	合計
旧制・新制小		7	7
新制中		1	1
旧制学校・新制高		3	3
合計		11	11

表 56 佐藤進のヨナ抜き音階使用数

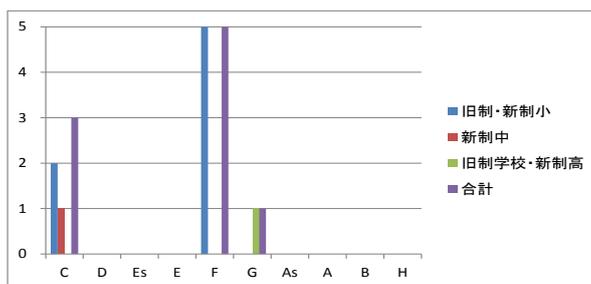


グラフ 101 佐藤進のヨナ抜き音階の割合

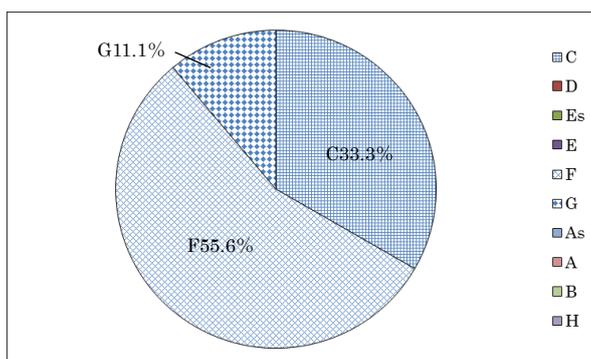
(17) 森川隆之 (1940～)

調性	C	D	Es	E	F	G	As	A	B	H	合計
旧制・新制小	2				5						7
新制中	1										1
旧制学校・新制高						1					1
合計	3				5	1					9

表 57 森川隆之の調性の傾向



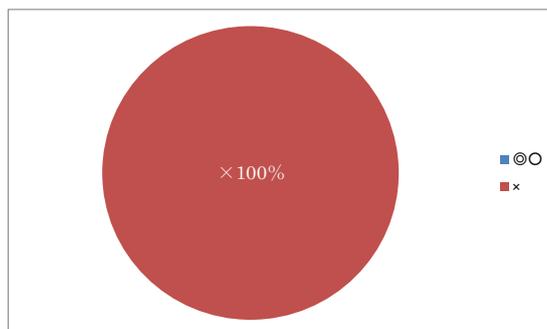
グラフ 102 森川隆之の調性の傾向



グラフ 103 森川隆之の調性の割合

ヨナ抜き音階	◎○	×	合計
旧制・新制小		7	7
新制中		1	1
旧制学校・新制高		1	1
合計		9	9

表 58 森川隆之のヨナ抜き音階使用数



グラフ 104 森川隆之のヨナ抜き音階の割合

森川隆之の校歌の調性は3種類のみで、F Dur（へ長調）が5曲、C Dur（ハ長調）が3曲、G Dur（ト長調）が1曲であった。音階は、すべて7音音階であった。

III 結論

尋常小学校などの旧制小学校、新制小学校、新制中学校では、F Dur（へ長調）とC Dur（ハ長調）の割合が高かった。F Dur（へ長調）の音域はC¹～D²が多く、C Dur（ハ長調）の音域は、C¹～D²またはC¹～E²が多い。C¹～D²は、この年代の児童・生徒にとって無理なく出せる音域であり、割合が高いのは頷ける。C Dur（ハ長調）の場合、旧制中学校・高等女学校などの旧制学校と新制高等学校はC¹～E²がとても多い。これは、心身の発達によって出せる音域が広がることを考慮したものであろう。

B Dur（変口長調）は、ほぼすべての時代・校種で見られる。音域はB⁰～D²が多く、F Dur（へ長調）やC Dur（ハ長調）よりも若干広がっている。同様な傾向はEs Dur（変ホ長調、B⁰～Es²が多い）やE Dur（ホ長調、H⁰～E²が多い）にも見られる。使える音域が広がると、多様な旋律が生まれる可能性がある。

D Dur（ニ長調）は、昭和26・31年度版学習指導要領の時代の高等学校、特別支援学校、高等専門学校を除いて、すべての校種に用いられている。音域は、小学校の場合多かったのがD¹～D²で、A⁰～D²も結構の数があった。新制中学校はD¹～D²が多く、旧制学校・新制高等学校はD¹～E²が多かった。

E Dur（ホ長調）は、最高音がE²になっているものが多い。学校名を見ると、富山高等女学校、高岡高等女学校、新川女子高等学校、戸出女子高等学校など女子教育のための学校が多い。これは、この年代の女子生徒がもつ瑞々しい高音域の音色を意識したといえるかもしれない。

ヨナ抜き音階は、旧制の時代はヨナ抜き音階が多く、時代が新しくなるにしたがって7音音階が多くなり、ある時点で逆転する。これはすべての校種で見られた。

作曲者について見ると、次のようであった。

①ヨナ抜き音階が多い

福井直秋 荒木得三 古瀬紋吉 黒坂富治

②7音音階が多い

信時潔 室崎琴月 橋本秀次 小澤達三 岡野貞一 小澤慎一郎

③100%7音音階

松本民之助 大澤欽治 岩河三郎 團伊玖磨 宮下舜爾 佐藤進 森川隆之

また、特定の調性を用いる傾向がある作曲家は次のようであった。

- ・福井直秋 D Dur（ニ長調） 19曲／38曲（50%）
- ・室崎琴月 F Dur（へ長調） 18曲／31曲（58%）
- ・古瀬紋吉 C Dur（ハ長調） 6曲／9曲（66.7%）
- ・小澤慎一郎 B Dur（変口長調） 23曲／48曲（47.9%）
- ・松本民之助 F Dur（へ長調） 5曲／9曲（55.6%）
- ・岩河三郎 F Dur（へ長調） 9曲／13曲（69.2%）

- ・佐藤進 F Dur (へ長調) 6曲／11曲 (54.5%)
- ・森川隆之 F Dur (へ長調) 5曲／9曲 (55.6%)

今回、富山県内の校歌について、調性・音域・ヨナ抜き音階の観点から時代別に調査したところ、さまざまな新しい発見があったことは有意義であった。今回の研究に際して、県内のすべての学校に校歌の情報提供をお願いしたところ、大部分の学校からご協力が頂けた。なかには、これまで調査しきれなかった旧校歌に関する情報を提供頂いた学校もあった。

また、本研究は、富山第一銀行奨学財団の研究助成を得て実施できたものである。各位に、深く感謝申し上げる次第である。

〈参考文献〉

- ・小澤達三『富山県校歌全集』、(1979年、パラマウント社)
- ・小澤達三『富山県校歌全集 余滴』、(1979年、パラマウント社)
- ・折橋昭彦『校歌の風景—中越地区小中学校校歌論考—増補版』(2006年、野島出版)
- ・富山県ひとづくり財団・富山県教育記念館編『校名・校章・校歌と教育への期待』(2010年、未出版)
- ・立山町教育センター・立山区域小学校教育協議会『立山区域小・中学校 校歌集』(2013年)
- ・堀江英一『富山県の小学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から』～『富山国際大学子ども育成学部紀要第5巻』(2014年)
- ・堀江英一『富山県の中学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から』～『富山国際大学子ども育成学部紀要第7巻』(2016年)
- ・堀江英一『富山県の旧制学校・新制高等学校・特別支援学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から』～『富山国際大学子ども育成学部紀要第8巻』(2017年)